

# 檢 非 違 使 の 研 究

A STUDY ON THE “KEBIISHI”

THE HIGH POLICE COMMISSIONER  
IN THE MEDIEVAL JAPAN

I.

大 學 院 學 生

小 川 清 太 郎

S. OGAWA

*Graduate Student*

# 目 次

	頁
序 言 .....	1
凡 例 .....	3
第一章 檢非違使 .....	5
第一 檢非違使の意義 .....	5
(I) 檢非違使——(II) 諸國檢非違使——(III) 神郡檢非違使	
第二 檢非違使の職掌 .....	9
(I) 檢非違使の職掌——(II) 諸國檢非違使の職掌——(III) 神郡檢非違使の 職掌	
第三 檢非違使の資格 .....	13
(I) 檢非違使の資格——(II) 諸國檢非違使の資格——(III) 神郡檢非違使の 資格	
第四 檢非違使の地位 .....	17
(I) 檢非違使の地位——(II) 諸國檢非違使の地位——(III) 神郡檢非違使の 地位	
第五 檢非違使の特質 .....	21
(I) 檢非違使の大寶令官制上の位置——(II) 檢非違使の常置職化——(III) 檢非違使の官化	
第二章 檢非違使廳 .....	29
第一 檢非違使廳の意義 .....	29
(I) 廳政執行 廳務管掌——(II) 獨立常置——(III) 特別地方行政府	
第二 檢非違使廳の地位 .....	32
(I) 長官の地位より觀たる檢非違使廳の地位——(II) 廳令より觀たる檢非 違使廳の地位	

<b>第三 検非違使廳と諸官司との比較</b> .....	35
(I) 検非違使廳と令制官司——(II) 検非違使廳と藏人所——(III) 検非違使 廳と勘解由使廳	
<b>第三章 検非違使の設置</b> .....	42
<b>第一 検非違使の設置</b> .....	42
(I) 検非違使の創設と史料——(II) 検非違使廳の創設と史料——(III) 史料 の缺逸——(IV) 谷森氏説と卑見	
<b>第二 諸國検非違使及び神郡検非違使の設置</b> .....	57
(I) 諸國検非違使の設置——(II) 神郡検非違使の設置	
<b>第四章 検非違使の沿革</b> .....	64
<b>第一 検非違使の沿革(其一 検非違使廳を中心として)</b> .....	64
(I) 検非違使廳創設時代——(II) 検非違使廳複合制時代——(III) 検非違使廳 單獨制時代	
<b>第二 検非違使の沿革(其二 政權の推移を中心として)</b> .....	69
(I) 藤原氏執政時代——(II) 院政時代——(III) 平氏執政時代——(IV) 幕府 執政時代	
<b>第三 諸國検非違使及び神郡検非違使の沿革</b> .....	82
(I) 諸國検非違使の沿革(其一 王朝時代)——(II) 諸國検非違使の沿革(其 二 鎌倉時代)——(III) 神郡検非違使の沿革	

(以下次號)

## 第五章 検非違使の權限

### 第一節 王朝時代に於ける検非違使の權限

#### 第一 總説

#### 第二 司法警察權(検非違使廳と衛府との關係)

- (I) 衛門府の司法警察權——(II) 検非違使の司法警察權——(III) 犯人捜  
査及び逮捕の方法——(IV) 司法警察權行使區域

### 第三 糺弾權(檢非違使廳と彈正臺との關係)

(I) 彈正臺の糺弾權——(II) 檢非違使の糺弾權——(III) 檢非違使の糺弾權及び司法警察權の併有——(IV) 糺弾に關する檢非違使と辨吏との確執——(V) 糺弾權行使區域

### 第四 裁判權(檢非違使廳と刑部省との關係)

(I) 盜犯處罰に關する檢非違使の立法的建議——(II) 檢非違使の死刑求刑——(III) 裁判管轄

### 第五 執行權

(I) 刑の執行——(II) 囚人の釋放——(III) 財産沒收——(IV) 贓贖物徴收——(V) 租稅徴收

### 第六 行政警察權

## 第二節 鎌倉時代に於ける檢非違使の權限

### 第一 總說

(I) 公・武・寺社の三權鼎立——(II) 公・武・寺社間の各固有法の法域——(III) 檢非違使廳と幕府との關係——(IV) 檢非違所と幕府との關係

### 第二 刑事裁判權及び警察權

(I) 檢非違使廳と六波羅との管轄——(II) 檢非違使廳の特別管轄——(III) 檢非違使廳の一般管轄

### 第三 民事裁判權

(I) 檢非違使廳の民事裁判沿革——(II) 土地所有權確認の裁判——(III) 土地處分法發令權

## 第六章 檢非違使の職制

### 第一 總說

### 第二 檢非違使の定員數

### 第三 檢非違使の補任

(I) 任用資格——(II) 通常任用法——(III) 特別任用法——(IV) 檢非違使の昇進——(V) 檢非違使補任による位階昇叙

#### 第四 檢非違使の派遣

#### 第五 別當宣と檢非違使廳令

(I) 別當宣 — (II) 檢非違使廳下文 — (III) 檢非違使廳下知狀 — (IV) 檢非違使移 — (V) 檢非違使廳牒

### 第七章 檢非違使廳の組織

#### 第一 檢非違使別當

(I) 資格の一(官位) — (II) 資格の二(經歷) — (III) 名稱 — (IV) 別當宣(廳宣) — (V) 別當交替による事務の引繼 — (VI) 統計 — (VII) 別當逸事

#### 第二 檢非違使佐

(I) 資格 — (II) 廳政廳務の執行 (III) 佐より別當への昇進

#### 第三 檢非違使尉

(I) 資格 — (II) 名稱 — (III) 叙留 (IV) 昇殿

#### 第四 檢非違使志

(I) 資格の一(道志) — (II) 資格の二(非成輩)

#### 第五 檢非違使府生

#### 第六 看督長

#### 第七 案主長

#### 第八 火長

#### 第九 放免

### 結 語

# 檢非違使の研究(一)

小川清太郎

## 序　　言

拙稿「檢非違使廳研究」は、前篇に於て「檢非違使の研究」を爲し、後篇に於て「廳例の研究」を行つた。而して或る事情よりして、後者は嚮きに早稻田法學第十六卷に之を掲載したが、今回、更に前者を茲に掲載することゝなつた。

然るに、この兩者は「檢非違使廳研究」にとつては、正に唇齒輔車の關係に在り、その一を缺くも「檢非違使廳研究」を不完全ならしむるのみならず、兩者、各自の十分なる諒解にすら事缺くに至るものである。従つて、本來、この兩者は時と處とを共にしてこそ、完全なる理解が期待せらるゝものにして、各別に分離するに於ては、到底、十分なる研究は爲し得ざるものである。この難點を幾分なりとも效果あらしむべく、前掲「廳例の研究」には、必要なる程度の史料を「檢非違使の研究」より借用せるものであるが、これと同様に、本稿に於ても、必要なる程度の史料を「廳例の研究」より取り入れることゝした。従つて、兩者を此のまゝ併合するに於ては、重複せる個處の存するは、蓋し止むを得ざる所である。

檢非違使は國史、就中、平安朝時代史に於ては重要なる役割を演ずるものにして、従つて、之に關する研究も幾多行はれ、各種の著作、雑誌、論文等に隨時隨處之を見るも、その最も著しきものは、三浦周行博士「明法家と檢非違使」(續法制史の研究、五五〇——五七一頁)、淺井虎夫氏「併歸使廳考」(史學雜誌、第十四編、第一號、第二號)、谷森饒男氏「檢非違使ヲ中

心トシタル平安時代ノ警察状態」の三者、及び法學博士牧健二氏「日本法制史論」所收の檢非違使に關する論述（同書、五九三——六〇三頁）を擧げ得る。本稿が是等四氏の研究の結果に負ふ所大なるは言ふ迄もなく、茲に深甚の謝意を表する次第である。

尙、本稿執筆に當つては、恩師金澤理康先生の不斷の御援助を辱うしたにも拘らず、乏しき内容に終れることは、先生及び遙か北京に在つて之を期待せられたであらう所の新民學院教授、法學博士瀧川政次郎先生に對して、眞に申譯無い次第である。

## 凡 例

- 一 日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄、類聚國史、本朝世紀、日本紀略、百鍊抄、扶桑略記、帝王編年記、今昔物語集、宇治拾遺物語、古事談、十訓抄、古今著聞集、愚管抄、政事要略、類聚三代格、延喜式、類聚符宣抄、別聚符宣抄、吾妻鏡及び公卿補任は國史大系刊行會發行の新訂増補國史大系本によつて頁數を示した。
- 一 令義解、増鏡及び榮華物語は經濟雜誌社發行の國史大系本によつて頁數を示した。
- 一 貞永式目及び新編追加は日本古代法典本により、朝野群載及び西宮記は改定史籍集覽本によつて頁數を示した。
- 一 職原鈔、官職祕鈔、百寮訓要抄、詠百寮和歌、任官勘例及び官職難儀は群書類從、第四輯によつて頁數を示した。
- 一 本朝文粹、玉葉、明月記及び太平記は國書刊行會本によつて頁數を示した。
- 一 山槐記、小右記及び中右記は史料通覽本により、長秋記は史料大成本によつて頁數を示した。
- 一 源平盛衰記及び平治物語は國民文庫刊行會本により、續古事談及び江談抄は國史叢書本により、枕草子は日本文學全書本により、徒然草は日本文學叢書本により、宇津保物語は國史大觀本により、それぞれ頁數を示した。
- 一 大日本史は義公生誕三百年記念會刊行本により、令集解は三浦、瀧川共著、定本令集解釋義によつて頁數を示した。
- 一 群書類從は經濟雜誌社發行の刊本により、續群書類從は續群書類從完



成會發行の刊本によつた。

- 一 以上の外の引用書に就ては、それぞれ當該個處に於て之を明示した。
- 一 古文書に見える異字は、印刷の都合上、大抵現代常用の文字に書き改めた。
- 一 引用文が原本に於て、二頁に互る時は、最初の頁數のみを示した。但し三頁以上に互る時は、「——」を以て其の範圍を示した。
- 一 引用文は成る可く必要の個處のみを示し、他は「前略」「中略」「下略」「云々」等の記號を附して省略した。
- 一 引用文の句讀は、原則としては原本に従つたが、間々自意を以て之を改め、又文意により之を補つた所もある。
- 一 引用文の或る個處に就て、他書のものとなれる個處ある時は、便宜上、自意を以て適當と思惟する方を採つた。
- 一 本稿の註は、註と云ふよりは寧ろ證と云ふ方が適當であるかも知れぬ。即ち本稿に謂ふ所の註は、大部分、本文の意味を註釋せるものに非ずして、本文に述べたる事實を論證したり、本文に引用せる原文の出所を示せるものである。
- 一 同一章中、數度同一の註の引用ある場合にも、成る可く重複の煩を厭はず、その都度之を掲げることゝした。
- 一 年代の次に括弧して記入せる數字は、西曆紀元の年數である。西洋法制史との比較對照に便ならしめたるに外ならぬ。

## 第一章 檢 非 違 使

### 第 一 檢非違使の意義

檢非違使は廣狹二様の意義を有する。廣義に於ける檢非違使とは、王朝時代の首都たる京都、地方の國及び郡、大宰府、伊勢、香取鹿島の各神宮寧て設置せられたる各重の食下輩吏を恩辱し、決處に於ける檢非違使とは、單に京都に設置せられたる檢非違使のみを指し、他は之を諸國檢非違使、府檢非違使、神郡檢非違使等と稱して、之を區別する。

#### (Ⅰ)檢非違使

檢非違使は京都に設置せられ、通例、衛門府官人を以て之を兼補せしめる(註一)。設置當初に於ては臨時の職に過ぎざりしが、後に檢非違使廳なる一官府を構成して常置の職となる。

#### (Ⅱ)諸國檢非違使

京都に設置せられたる檢非違使に對し、地方の國及び郡に設置せられたる檢非違使を諸國檢非違使と稱する(註二)。檢非違使が檢非違使廳を構成するに對して、諸國檢非違使は國司に直屬する(註三)。故に其の所屬國名を冠稱して、その檢非違使の所屬を明瞭ならしむることもある。例へば「大和國檢非違使伊勢朝臣諸繼」と云ふが如きである(註四)。而して後に至つて、諸國檢非違使には別に權檢非違使が設けられた(註五)。

諸國檢非違使は各國々に設置せられたるものであるが、九州一圓の地域たる九國二嶋を統轄すべき大宰府にも檢非違使が設置せられ、之を特に府檢非違使(註六)、或は大宰檢非違使と稱する(註七)。而して府檢非違使にも正、權の區別が設けられ、前者を正檢非違使、後者を權檢非違使と稱した(註八)。

諸國檢非違使は、後には之を檢非違所使と稱した(註九)。而して京都に於ける檢非違使の構成する官府を檢非違使廳と稱する如く、檢非違所使の構成する官署を檢非違所(註一〇)、或は檢非違使所(註一一)と云ひ(註一二)、檢非違所使を單に國の檢非違使とも云つた(註一三)。

### (III) 神郡檢非違使

神郡檢非違使は伊勢國伊勢大神宮、常陸國香取鹿島兩神宮等の神宮に直屬する檢非違使にして、神宮司の管轄區域たる神郡を管轄すべき所より、特に之を神郡檢非違使と云ふ。従つて神郡檢非違使は諸國檢非違使とは全然獨立せる別箇の存在にして、例へば、伊勢國檢非違使と伊勢大神宮の神郡檢非違使とは、何等相互間に關係あるものではない(註一四)。伊勢大神宮の神郡檢非違使は別に之を大神宮檢非違使とも稱し(註一五)、又、香取鹿島兩神宮の神郡檢非違使には、正、權の區別が設けられ、それぞれ正檢非違使、權檢非違使とも稱した(註一六)。

註一 檢非違使。(中略)爲衛府之人補之。(職原鈔、下、六四三頁)

註二 大和國檢非違使正六位上伊勢朝臣諸繼預把笏。諸國檢非違使把笏。始於此人。(文德實錄、卷七、齊衡二年三月廿六日乙巳條、七二頁)

註三 これは次に掲ぐる太政官符が之を示してゐる。

太政官符大和國司

從八位上伴宿禰公扶

右從三位守大納言源朝臣高明宣。奉 勅。件人宜補彼國檢非違使者。國宜承知。依宣行之。其公廩准一分給之。符到奉行。

右大弁

左大史

天曆八年二月廿三日

(類聚符宣抄、第七、諸國檢非違使、一七四頁)

註四 所屬國名を冠する一例は本文記載の如くなるも(文德實錄、卷七、齊衡二年三月廿六日乙巳條、七二頁、尙、註二參照)、特に國內の特定郡のみを管轄する場合に、其の所屬郡名を冠したるや否やは明かでない。併し郡に檢非違使の置かれたることは、次の事實を以て知られる。

武藏國每郡置檢非違使一人。以凶猾成黨。群盜滿山也。(三代實錄、卷五、貞觀三年十一月十六日丙戌條、八二頁)

平泉郡内檢非違使所事。可管領之旨。葛西三郎清重賜御下文。於郡内。諸人停止濫行。可糾斷罪科之由云々。(吾妻鏡、第九、文治五年九月廿四日辛巳條。前篇、三五八頁)

**註五** 從八位上伴宿禰有仁 加置大和國權檢非違使。初望大和國檢非違使。

承平七年十二月廿五日

右少弁源朝臣相職傳宣。大納言藤原朝臣扶幹宣。奉 勅。當年內給一分之代。宜以件有仁始置大和國權檢非違使者。

承平八年正月十四日

左大史大窪則善 奉

(別聚符宣抄、二一頁)

**註六** 補府檢非違使

太政官符

大宰府

從五位上姓名

右。右大臣宣。奉 勅。件人宜補彼府檢非違使者。府宜承知。依宣行之。其公廨一分事給之。符到奉行。

辨

史

(朝野群載、卷二十、三六〇頁)

**註七** 大宰檢非違使。元旦平旦奏之。四方拜還御間。(年中行事祕抄、正月、群書類從、第五輯、三〇三頁)

尙又、府檢非違使を大宰非違使と稱したことは、次の一例を以ても知られる。

大宰非違使。正月一日平旦。奏賜。不論人之上下。依先奏賜之云々。(西宮記、卷十二、臨時一、三一五頁)

**註八** 太政官符大宰府

應停史生二員加置檢非違使正權各一人事

右參議權帥正四位下橘公賴奏狀稱云々。望請停史生二人加置檢非違使二人者。大納言正三位藤原朝臣恒佐宣。奉 勅。正權各一人依請者云々。

承平五年十一月廿七日

(別聚符宣抄、二〇頁)

**註九** 一同可被停止伊賀國檢非違所使。連日亂入寺領。無指故據。取百姓牛馬私

財。追捕莊家。不當事。

右於當寺領者。本自無國使亂入之例。縱雖有無道之輩。寺家行刑罰。全非國衙沙汰。若又罪於及大事之時者。國司觸寺家。存理有糾定。是承前不易之例也。而當任檢非違所使。去四月以後迄至昨今。或十九人。或七八人四五人。連日無絕亂入寺領云々。

文治二年七月日

(東大寺文書、大日本史料、第四編之一、五三〇頁)

註一〇 康保二年十三。右大臣<sup>〇</sup>奏<sup>〇</sup>檢<sup>〇</sup>非<sup>〇</sup>違<sup>〇</sup>所<sup>〇</sup>勘文。仰云。好古賜播磨非違下已了。自今以後。諸國檢非違使之替。秋滿年誤。雖下宣旨非違所。須申返之。(西宮記、卷十二、臨時一、三一五頁)

是のみならず、南都には清盛入道は、平氏の中の糟糠也。武家に取ては塵埃也。いかにといへば祖父正盛は正しく大藏卿爲房の加賀國知行の時、檢非違所に被召任き云々。(源平盛衰記、字卷第二十四、南都合戰同焼失附胡總樂河南浦樂事、五七六頁)

註一一 平泉郡内檢非違使所事。可管領之旨。葛西三郎清重賜御下文。於郡内。諸人停止濫行。可糾斷罪科之由云々。(吾妻鏡、第九、文治五年九月廿四日辛巳條。前篇、三五八頁)

註一二 從つて諸國檢非違使が檢非違所使なる名稱を以て呼ばるゝに至れる頃には、既に國衙に配屬せられず、別に一官署を構成せるものゝ如くである。

註一三 わが身は國の檢非違使ぞかしとて、其事となく人はおちおそれんずと、勝にのりて小事をとがめて威をふるはんとし、國の者共をも、所從などの様におもひなして振舞事あらば、後には能事あらんや、かへて耻に成べき企也云々。(澁柿、賴朝、佐々木被下狀、群書類從、第十七輯、一五九頁)

註一四 蓋し神郡は國衙使不入の特權を有するを以て、國司に直屬する諸國檢非違使も、神郡内に於ては其の權限を行使することは許されなかつたのである。又さればこそ、後述するが如くに、神郡を管轄すべき別個の檢非違使の設置の必要を生じたるものである。本稿、五九——六〇頁參照。

註一五 差進文書紛失日以此定案詞後代可尋申 (中略)

一 以應德二年六月九日。大神宮檢非違使新家俊晴申文之。東寺御領川合大國御庄勅施入田六十六町也。内十五町年來官物進未結解載也。 (中略)

應德三年七月 日注留之

東寺權上座大法師位

(東寺百合古文書、古事類苑、官位部、第二冊、一七八頁)

**註一六** 注進 香取社諸神官總領庶子死亡逃亡跡田畠屋敷已下目錄

一 行事禰宜庶子死亡跡 (中略)

一 權<sup>〇〇</sup>檢<sup>〇〇</sup>非<sup>〇〇</sup>違<sup>〇〇</sup>使<sup>〇〇</sup>庶子分 (中略)一 正<sup>〇〇</sup>檢<sup>〇〇</sup>非<sup>〇〇</sup>違<sup>〇〇</sup>使<sup>〇〇</sup>逃亡跡田畠事 (中略)

嘉慶二年十二月二日

案 主 在判

(以下省略)

(香取舊大禰宜家所藏文書、古事類苑、官位部、第二冊、一八〇頁)

香取大神宮元三御頭人之次第。

官介殿。次權<sup>〇〇</sup>檢<sup>〇〇</sup>非<sup>〇〇</sup>違<sup>〇〇</sup>使<sup>〇〇</sup>。次正<sup>〇〇</sup>權<sup>〇〇</sup>檢<sup>〇〇</sup>非<sup>〇〇</sup>違<sup>〇〇</sup>使<sup>〇〇</sup>。次大祝。次錄司代。次四郎神主。

次吉原檢校。次權禰宜。田所。正月祭擬祝。次物申祝 (中略)

天文二十四年癸丑八月三日

大禰宜散位大中臣實隆花押

物申方へ

(香取文書、古事類苑、官位部、第二冊、一八一頁)

## 第 二 檢非違使の職掌

檢非違使の職務は其の名の示すが如く、「非違<sup>たゞ</sup>を檢す」に在る。こゝに「非違」とは、或は「非ハ非法ナリ。違ハ違法ナリ。」と云ひ(註一)、或は「非ハ非法ナリ。違ハ違制ナリ。」と云へるが如く(註二)、法律制度違反の意にして、就中、特に犯罪行爲を指すものと解される(註三)。次に「檢<sup>たゞ</sup>す」とは、「かんがへる(校)」、「さがす(捜査)」、「とどむ(拘置)」、「とらへる(逮捕)」、「めぐりしらべる(巡察)」等の意義を有する(註四)。

之を要するに、檢非違使の職掌は、之を糾彈、司法警察、裁判の三方面に大別することが出来る。茲に糾彈とは非違の彈劾を意味し、官人の害政の摘發彈劾及び犯罪の捜査摘發を云ふ(註五)。前者を監察、後者を檢察と云ふも大過はない。次に司法警察とは犯人の逮捕を云ひ、裁判とは主として刑事裁判を指し、犯罪者の罪狀の事實を審理認定し、之に科すべき刑罰を宣告する行爲である。

### (Ⅰ) 検非違使の職掌

令の規定によれば、糾弾は彈正臺の管掌する所なるが(註六)、検非違使も亦、彈正と同じく糾弾を掌つた(註七)。検非違使式は之を「使ノ掌ル所ハ彈正ノ彈ズル事ニ準ジ、竝ニ臨時ノ宣旨ニ依リテ之ヲ行フ。」と規定してゐる(註八)。又、司法警察は、元來、衛府の掌る所なるが(註九)、検非違使も亦、衛府と同じく司法警察を掌つた(註一〇)。彈正臺式は之を「凡ソ犯人逃走セバ、検非違使ヲシテ追捕セシム。」と規定してゐる(註一一)。更に又、刑事裁判は刑部省の掌る所なるが(註一二)、検非違使も亦、之を掌つた(註一三)。例へば検非違使式に之を「盜人ハ輕重ヲ論セズ、刑部ニ移スヲ停メ、別當直チニ着駄シ、役所ニ配シテ駈使セシム。」と規定してゐるが如きである(註一四)。

以上は京都に於ける検非違使の職掌の概略であるが、検非違使の有する職務は、沿革的に見れば、令の各官司と併立して附興せられたるものに非ずして、むしろ各官司の職權を奪取せる感がある。職原鈔は之を「朝家此職ヲ置キテ以來、衛府ノ追捕、彈正ノ糾弾、刑部ノ判斷、京職ノ訴訟、併セテ使廳ニ歸ス。」と述べて(註一五)、糾弾、司法警察、裁判の獨裁化を物語つてゐる。尙之に關しては、後に詳述する所がある。

### (Ⅱ) 諸國檢非違使の職掌

令の規定する所によれば、地方に於ける國內の糾弾、司法警察、裁判の職務は、「所部の糾察」なる名目の下に、凡て國司の管掌する所であつたが(註一六)、諸國檢非違使の設置せられたる國々に於ては、彼も亦、是等の職務を管掌した。例へば、延喜十四年(914)四月の三善清行の奏上には、諸國の檢非違使は「境内ノ奸濫ヲ糾シ、民間ノ兇邪ヲ禁ズルコト」を掌ると見えて(註一七)、その職務の内容を示し、更に「國中ノ追捕斷罪」を諸國檢非違使が管掌するは、「猶京下ニ判事及ビ檢非違使有ルガ如シ」と述べて(註一八)、その職掌が京都に於ける檢非違使と同様なることを示してゐる。

而して、國司は國內の治安維持を以て重要なる職務となすが故に、その任に當れる諸國檢非違使の職責亦頗る重大にして、既に寛平六年（894）九月十八日の太政官符は、之を「糾察追捕、職掌惟レ重シ云々」と論じて、夙に其の重職なる所以を強調した（註一九）。

### （Ⅲ）神郡檢非違使の職掌

伊勢及び常陸の兩國には、それぞれ伊勢大神宮及び香取鹿島の兩神宮が在します。是等の神宮は、神宮直轄の領地として所謂神郡を有し、之には國衙使不入の權と稱して、國司の有する徵租、檢斷等の一般行政權の行使に對して、一種の治外法權的な特權を有したが、神宮檢非違使は此の神郡を管轄し、管内の治安維持を其の職務とした。寛平九年（897）十二月廿二日の太政官符は、之を單に「一向ニ犯罪ノ人ヲ糾サシム」と略言してゐるが、鹿島神宮補任記によれば、神郡檢非違使は「神領中ノ非違ヲ檢斷スル」役にして（註二〇）、「刑法竝ニ諸訴訟等」の事を掌る由が見えて、その職掌を明かにしてゐる（註二一）。

註一 非違。謂。非者非法也。違者違法也。（令集解、卷五、職員令、一二二頁）

註二 彈正式云。彈奏内外非違。右舊說。以爲。非。非法也。違。違制也。（政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五二六頁）

註三 非違に對する適當な言葉は、現今に於ては求められぬ。必ずしも今日の違法と同じではない。此の時代に於ける刑法に觸るべき廣義の犯罪を以て非違を解する外はない（法學博士牧健二氏「日本法制史論」朝廷法時代、上卷、五三四頁）。唯、何が違法なりやに就ては、律令違反及び律令以外に規定せられたる法令違反を以て違法を解すべく、又この時代の犯罪は、現今の刑法上の犯罪の概念よりも遙かに廣く、官吏の職務懈怠も、亦、犯罪の一と見做されてゐたことに注意すべきである。

尙、檢非違使の職務上の實績より非違の概念を摘出すれば、以上の法令違反、官吏の職務懈怠の外に、迷信、災害等も挙げられる（續日本後紀、卷二、天長十年十二月癸未朔條、一八頁。同書、卷六、承和四年十月辛卯朔條、六



九頁、參照)。

**註四** 康熙字典、卯集中、文久三年刊本、第十五冊、一〇六丁表。同、辰集中、第十八冊、一一〇丁表。

**註五** 糾彈には公の糾彈と私の糾彈とがある。前者は彈正臺自ら之を爲し、後者は所謂告言にして私人自ら之を爲し得ること、律令の規定する所である。而して彈正臺の爲す糾彈は官人の害政糾彈に止まり、私人の爲す糾彈即ち告言は官人及び庶民の犯罪に關するものであつた。律令の刑事訴訟法に於ては、臧狀露顯なる現行犯以外の犯罪は、糾彈がなければ其の犯人の逮捕は出来なかつた。

**註六** 尹。掌肅清風俗。彈奏内外非違事。(令義解、卷一、職員令、彈正臺、五三頁)

**註七** 又去弘仁十一年十二月十一日宣旨稱。檢非違使所掌之事。與彈正同。臨時宣旨。亦糾彈之者。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、天長九年七月九日太政官符、應納雜色人贖物事、六四五頁)

**註八** 檢非違使式云。使之所掌。准彈正彈事。并依臨時宣旨行之。(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五一八頁)

**註九** 其衛府糾捉罪人。非貫屬京者。皆送刑部者。(令義解、卷十、獄令、二八五頁)

分遣六衛府。搜捕京中盜竊。(續日本後紀、卷九、承和七年三月六日壬午條、九九頁)

**註一〇** (前略) 自今以後。緣糾違犯。有可追捕者。臺使相通。遣檢非違長等。隨事追捕云々。(續日本後紀、卷八、承和六年六月六日乙卯條、八八頁)

遣左右近衛左右兵衛及檢非違使左右馬於京南捕群盜。(文德實錄、卷九、天安元年三月十六日癸丑條、九六頁)

**註一一** 凡犯人逃走。令檢非違使追捕。(延喜式、卷四十一、彈正臺、九一六頁)

**註一二** 卿。掌鞠獄。定刑名。決疑讞。良賤名籍。囚禁。債負事。(令義解、卷一、職員令、刑部省、四三頁)

**註一三** 斷獄刑法及訴訟當省所掌也。本朝先例如此。然而被置檢非違使之後。刑部職掌有名無實。(職原鈔、上、六三三頁)

**註一四** 盜人不論輕重。停移刑部。別當直着駄。配役所令駈使。(政事要略、卷八十四、糾彈雜事廿四、六八九頁)

- 註一五** 朝家置此職以來。衛府追捕。彈正糾彈。刑部判斷。京職訴訟。併歸使廳。  
(職原鈔。下、六四三頁)
- 註一六** 守。掌祠社。戶口。簿帳。字養百姓。勸課農桑。糾察所部云々。(中略)  
掾。掌。糾判國內。審署文案。勾稽失。察非違。(令義解、卷一、職員令、大  
國、五八頁)
- 註一七** 諸國檢非違使。掌糾境內之奸濫。禁民間之凶邪云々。(本朝文粹、卷二、  
意見封事、延喜十四年四月二十八日、三善清行上封事、三六頁)
- 註一八** 國中追捕及斷罪。一向委此檢非違使。猶如京下有判事及檢非違使也云  
々。(同上)
- 註一九** 右檢案內。把笏帶劍。威儀不輕。糾察追捕。職掌惟重。而年來所任。不  
必其人。官縱雖卑。還何疏略者云々。(類聚三代格、卷五、定秩限事、二三四頁)
- 註二〇** (前略)望請。神民之中幹事者。充檢非違使。一向令糾犯罪之人。(類聚三  
代格、卷一、神郡雜務事、寬平九年十二月廿二日太政官符、應置伊勢大神宮  
神郡檢非違使事、四〇頁)
- 註二一** 檢非違使。是毛行事職也。神領中乃非違於檢斷須留役也。刑法并諸訴訟  
等之事於掌留。(鹿島神宮補任記、古事類苑、官位部、第二冊、一八〇頁)

### 第 三 檢非違使の資格

檢非違使に補任せらるゝ資格は、檢非違使の種類により異なる。概して  
云へば、檢非違使(京都)は衛門府官人、諸國檢非違使は官人、神郡檢非違使  
は神民(神郡内の居住者)たることを以て、その補任の資格要件としてゐる。

#### (I) 檢非違使の資格

檢非違使は衛門府の官人を以て之に補するを通例とし、稀には近衛府兵衛  
府の官人を以て之に補する場合もある(註一註)。いづれにせよ、檢非違使  
は帶劍の武官を以て之に補し、文官を以てすることはない。但し、特別に  
非成業と稱する院主典代廳官、太政官の史生、藏人所の出納、諸家の下家  
司中にて譜第器用の者は、まづ衛門府生に任じて、然る後に檢非違使に補  
せらるゝ場合がある(註二)。之を要するに、檢非違法は無官の者を以て之

に補することなく、必ず本官を有する者、通常、衛門府官人たることを以て、その補任の有資格者とする。

檢非違使は所謂宣下の職なるを以て（註三）、定期の任官叙勳たる除目により補せらるゝものに非ずし、臨時に宣旨を蒙ることにより之に補せられる。之を稱して「檢非違使宣旨を蒙る」（註四）、或は單に「使の宣旨を蒙る」と云ふ（註五）。従つて、檢非違使には諸國檢非違使の如き一定の在職期限が無い。

## （Ⅱ）諸國檢非違使の資格

京都に於ける檢非違使は、通常、衛門府に本官を有する者の兼職する所なるに對して、諸國檢非違使は斯くの如き制限を受けず、單に有位者たるを以て足る。従つて京都の檢非違使の職に在る者は、別に本官を有する者の兼職なるに對して、諸國の檢非違使の職に在る者は、それ自體が一の官人の如く見做される。

諸國檢非違使の任用は、太政官より太政官符の形式を以て國司に通達せられる（註六）。通例、檢非違使の設置を必要とする國よりの申請に基き、始めて其の設置が許可せられる（註七）。従つて、諸國檢非違使は全國的に配置せられたるものに非ずして、特に治安の紊亂せる國々に設置せられた（註八）。而して諸國檢非違使たるの資格は有位者に限り、無位の者を以て之に任ずるは違法であつた（註九）。又、國司が專斷を以て當該地方の豪族より贖勞料を收納して、之を諸國檢非違使に任用するが如きも違法とされた（註一〇）。

寛平六年（894）九月十八日の太政官符によれば（註一一）、諸國檢非違使の任期は一期を六ヶ年に限定してゐる。而して諸國檢非違使の職には永久性を認めず、隨時に廢置することを得るを以て、諸國檢非違使の職に在る者、六ヶ年の任期を終へたる時は、その後任の有無を問はず直ちに職を解くことになつてゐた（註一二）。

## (III)神郡檢非違使の資格

神郡檢非違使の資格は、二個の條件を具備することを要する。その一は神郡内の居住者たること。その二は神民中の事に幹<sup>つよ</sup>からん者たること。即ち是れである(註一三)。従つて神郡檢非違使は、京都、諸國の檢非違使の如く、必ずしも有位者たることを要しない。従つて其の任用は如上の有資格者たる以上、全く神宮は是れが自由採用を爲し得るも、採用せられたる者は太政官を通じて勅裁を請ふことを要した(註一四)。

註一 檢非違使。(中略)爲衛府之人補之。(職原鈔、下、六四三頁)

別當一人。參議已上。尤擇其人也。補此職之人。必帶衛門兵衛督。(中略)佐尉志必衛門也。但近衛兵衛邂逅有例云々。(職原鈔。下、六四三一四頁)

註二 非成業之輩轉任。爲規模。稱非成輩者。院主典代廳官。太政官史生。藏人所出納。諸家下家司中。譜第器用者。先任左右衛門府生。蒙使宣旨也。(職原鈔、下、六四四頁)

註三 檢非違使。(中略)別當以下爲宣下之職。(職原鈔、下、六四三頁)

註四 (前略)犯人籠禁中。藏人右兵衛尉源齊賴。竝瀧口源初。小野幸任等捕進件犯人。仍齊賴蒙檢非違使宣旨云々。(扶桑略記、第廿九、天喜三年三月十八日條、二九三頁)

註五 此御時平の將門といふ者あり、上總介高望が孫なり、執政の家につからまつりけるが使の宣旨を望み申けり、不許なるによりいきどほりをなし東國に下向して叛逆をおこしき。(神皇正統記、群書類從、第二輯、七四頁)

註六 次の太政官符が之を示してゐる。

「諸國檢非違使」

太政官符大和國司

從八位上伴宿禰公扶

右從三位守大納言源朝臣高明宣。奉 勅。件人宣補彼國檢非違使者。國宜承知。依宣行之。其公廩准一分給之。符到奉行。

右大弁

左大史

天曆八年二月廿三日

(類聚符宣抄、第七、諸國檢非違使、一七四頁)

**註七** 天慶九年、隱岐國より太政官に檢非違使設置を申請せるに對する、太政官よりの許可の次第は、次の官符が之を示してゐる。

太政官符隱岐國司

應補檢非違使大初位下伊我部安國事

(前略)此國遠離陸地。獨居海島。邊要之境。尤可肅清者也。而□之輩。或稱修高家贅。或號爲私交易。□來任不絕求在海物。侵漁少民。因斯所部□□調物難修。□雖加制止。習而不悛。如是之漸。無紕斷之所致也。況乎官舍官物分在別島。非常之危不能不慎。謹檢案内。檢正非違。事在要務。而此國檢非違使職。未被始置。若不經申請。恐無期補任。今件安國情操廉直。文武相兼。國用擬任。寔堪其職。望請因准諸國例。被任件職。將令糾部內違濫者云々。(後略)

天慶九年三月十三日

(別聚符宣抄、二三頁)

**註八** この事實は、次の近江國が解狀を太政官に上り、檢非違使の増員を申請せることに依つても窺はれる。

近江國司解 申請 官裁事

請被因准諸國例。補任檢非違使四員狀

右此國。(中略)境接五畿。驛承三道。野狽之輩。往還不絕。盜賊之類。遍滿境內。頃年所被補任。檢非違使三人。其員尤少。因之。追捕檢察。少人勤行。加以上下國司遙授數多。任用之吏從事者少(中略)因准大和播磨讃岐等國例。被置四員檢非違使云々。

天曆三年正月廿一日

近江國申請檢非違使。宜加置權員一人者。

天曆三年三月七日

(別聚符宣抄、二二一三頁)

**註九** 寛平六年九月十八日太政官符。應諸國檢非違使立秩限并停補無位人事。(類聚三代格、卷五、定秩限事、二三四頁)

尙、註一一、參照。

註一〇 延喜十四年四月二十八日。從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事。

一、請停以贖勞人補任諸國檢非違使及弩師事。(本朝文粹、卷二、意見封事、三六頁)

尙、本稿、二〇頁、註七、參照。

註一一 寬平六年九月十八日太政官符。應諸國檢非違使立秩限并停補無位人事。

(前略) 宜自今以後。停補無位人。并以六年爲一秩。唯職非永例。隨時廢置先任之輩。秩限滿。則不待替人。直從解任。(類聚三代格、卷五、定秩限事、二三四頁)

註一二 凡諸國檢非違使。六年爲一秩。限滿則不待替人。直定解任。(延喜交替式、五六頁)

註一三 寬平九年十二月廿二日太政官符。應置伊勢大神宮神郡檢非違使事。(前略)

望請。神民之中幹事者。充檢非違使云々。(類聚三代格、卷一、神郡雜務事、四〇頁)

註一四 寬平九年十二月廿二日太政官符。應置伊勢大神宮神郡檢非違使事。(前略)

官錄解狀。謹請 天裁者云々。(類聚三代格、卷一、神郡雜務事、四〇頁)

## 第 四 檢非違使の地位

檢非違使の地位は、之を對外的と對內的とに分つて考察することが出来る。前者は檢非違使と他の官職との地位の比較であり、後者は檢非違使それ自體の有する地位である。

### (Ⅰ)檢非違使の地位

京都に於ける檢非違使は、既述の如く衛門府官人の兼職する所である。即ち檢非違使それ自體が本官に非ずして、他に本官を有する官人の兼職である。その兼職なるにも拘らず、檢非違使の職の重職なると、遙かに此の職を兼ねる者の本官以上に重視せらるゝことは、職原鈔が「朝家此職ヲ置キテ以來、衛府ノ追捕、彈正ノ糾彈、刑部ノ判斷、京職ノ訴訟、併セテ使廳ニ歸ス。仍テ國家ノ樞機タリ、歷代以テ重職ト爲スモノナリ。」と云へ

るが如く(註一)、その有する権限の廣範圍に及べることを以てしても、之を知ることが出来る。尙之に就ては後に詳述する所がある。

檢非違使は一の職名なるを以て、之を兼職する衛門府官人には位階の高下の別あるも、檢非違使それ自體としては、何等の位階を有するものではない。従つて衛門府の官人としては佐、尉、志、府生等の地位を有し、衛門府官人としては地位の高下の別ある者も、等しく檢非違使の職を兼ねる時は、少くとも檢非違使としては同等の職務に在るべきである。然し後に至り、檢非違使の職權の擴大強化と共に、檢非違使それ自體が一の官人の如くに見做され、檢非違使間にも、その本官の位階に應じて、自づから上下の別を生ずるに至つた。(委細後述)

## (II) 諸國檢非違使の地位

京都に於ける檢非違使は、即ち武官の兼職にして把笏帶劍の資格を有するも、諸國檢非違使は、その當初に於ては必ずしも此の資格を有しなかつた(註二)。諸國檢非違使にして、初めて把笏を許されたる者は、大和國檢非違使伊勢朝臣諸繼にして、時に齊衡二年(855)三月であつた(註三)。而して寛平年間(889—897)の頃には、全國の諸國檢非違使は總て把笏帶劍となれるものゝ如く、寛平六年(894)九月十八日の太政官符によれば(註四)、諸國檢非違使は「笏ヲ把リ劍ヲ帶ビ、威儀輕カラズ」と見えてゐる。而して此の威儀輕からざる所以は、畢竟、諸國檢非違使の重職たることを示すものにして、さればこそ、同上太政官符には、「官縦へ卑シト雖モ、選ブニ何ゾ疎略ナランヤ」と云ひ、諸國檢非違使の職にある者の官位の低きに拘らず(註五)、その人選は慎重ならんことを命じてゐる。

令の規定によれば、國の非違を糾すは國司の權限にして、太政官より任命せられたる諸國檢非違使が、その非違を糾すを以て其の職務とするは、畢竟、太政官より國司へ諸國檢非違使補任の官符を下すことにより、非違糾察の權を、國司より諸國檢非違使に委任することゝなる。この委任が後

には太政官符の頒下を待たずして、國司の專斷を以て行はれ、茲に上着の豪族を諸國檢非違使に任するの弊害を生むに至つた。寛平六年(894)九月十八日の太政官符は此の弊害を認め、無位の者を以て諸國檢非違使に補すことを禁じたが(註六)、この禁令も、約二十年を経たる延喜十四年の頃には殆ど無視せられ、延喜十四年(914)四月二十八日の三善清行の上奏によれば、「今此ノ職ニ任スル者ハ、皆是レ當國ノ百姓、贖勞料ヲ納メタル者ナリ。」とありて賣官の風あることを指摘し、「徒ラニ公俸ヲ費シ、差役ニ堪エズ、空シク其ノ名ヲ帶ビ、曾テ其ノ器ニ非ズ。」と述べて諸國檢非違使の無能と名譽職化とを論じ、更に之をば「亦猶畫餅ノ食スベカラズ、木吏ノ言フ能ハザルガ如シ」と痛烈に難じて居る(註七)。

かくの如く、諸國檢非違使に就ては、寧ろ弊害が多く、徒らに其の職權と地位とを誇るのみであつた様であるが、源賴朝が佐々木左衛門尉家綱へ與へたる書状の中にも、「わが身は國の檢非違使ぞかしとて、其事となく人はおちおそれんと、勝にのりて小事をとがめて威をふるはんとし、國の者共をも、所從などの様に思ひなして振舞事あらば、後には能事あらんや、かへて恥に成べき企也。」と述べたる位なれば(註八)、地方に於ける其の權勢の程も偲ばれる。

### (III)神郡檢非違使の地位

次に神郡檢非違使に就ては、宇多天皇の寛平九年十二月二十二日の伊勢大神宮檢非違使に關する太政官符が之を明示してゐる。之によれば、神郡檢非違使たるものは「神民ノ中ノ事ニ幹<sup>ツヨ</sup>カラシテ事ニ從フ」たることを要し、「俸料ヲ給ハズ、大内人ニ准ジテ把笏シテ事ニ從フ」ものにして、その「官ハ解狀ニ錄シ、謹ミテ天裁ヲ請フモノ」とされてゐる(註九)。

從つて、神郡檢非違使は無俸給ではあるが、その地位は大内人に准ぜられて把笏の待遇を受くるものであり、その補任に就ては大神宮より太政官に解<sup>げ</sup>を上り、天皇の御裁可を請ふことを必要とした。この意味に於て、神



郡檢非違使は諸國檢非違使に比して、遙かに其の地位を重んぜられたることが知られる。

**註一** 朝家置此職以來。衛府追捕。彈正糾彈。刑部判斷。京職訴訟。併歸使廳。仍爲國家之樞機。歷代以爲重職者也。(職原鈔、下、六四三頁)

**註二** 諸國檢非違使が必ずしも帶劍把笏の有資格者に非ざるとは、三代實錄、卷十六、貞觀十一年三月廿二日庚辰條に、「令下總國檢非違使。帶劍把笏。」(二四六頁)とあるにても知られる。即ち是は、下總國檢非違使は設置當初より帶劍把笏の有資格者に非ずして、貞觀十一年三月廿三日に至り、その資格を附與せられたるものと解すべきである。

**註三** 大和國檢非違使正六位上伊勢朝臣諸繼預把笏。諸國檢非違使把笏。始於此人。(文德實錄、卷七、齊衡二年三月廿六日乙巳條、七二頁)

**註四** 寬平六年九月十八日太政官符。應諸國檢非違使立秩限并停補無位人事。右檢案内。把笏帶劍。威儀不輕。糾察追捕。職掌惟重。而年來所任。不必其人。官縱雖卑。還何疎略者。大納言正二位兼行左近衛大將皇太子侍陸奥出羽按察使源朝臣能有宣。奉勅。宜自今以後。停補無位人。并以六年爲一秩。唯職非永例。隨時廢置。前任之輩秩限滿。則不待替人。直從解任。(類聚三代格、卷五、定秩限事、二三四頁)

**註五** 大體に於て、正六位以下である。文德實錄、卷七、齊衡二年三月廿六日乙巳條に示す大和國檢非違使伊勢諸繼は正六位上にして(註三參照)、類聚符宣抄、第七に示す太政官符による諸國檢非違使の補職辭令によれば、伴宿禰公扶は從八位上である(本稿、一五頁、註六、參照)。

**註六** 寬平六年九月十八日太政官符。應諸國檢非違使立秩限并停補無位人事。(類聚三代格、卷五、定秩限事、二三四頁)

尙、註四、參照。

**註七** 一、請停以贖勞人補任諸國檢非違使及舒師事

右諸國檢非違使。掌糾境內之奸濫。禁民間之凶邪。然則國宰之爪牙。兆庶之嚮策也。必須明習法律兼詳決斷。而今任此職者。皆是當國百姓。納贖勞料者也。徒費公俸。不堪差役。空帶其名。曾非其器。亦猶如畫餅不可食。木吏不能言。伏望。監試明法學生。宛任職々。其試法一如明經之試。國中追捕及

斷罪。一向委此檢非違使。猶如京下有判事及檢非違使也。(下略)

延喜十四年四月二十八日、從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事  
(本朝文粹、卷二、意見封事、三六頁)

註八 謚柿、賴朝、佐々木被下狀。(群書類從、第十七輯、一五九頁)

註九 (前略)望請。神民之中幹事者。充檢非違使。一向令糾犯罪之人。但不給俸料。准大内人把勢從事者。官錄解狀。謹請 天裁者云々。(類聚三代格、卷一、神郡雜務事、寛平九年十二月廿二日太政官符、應置伊勢大神宮神郡檢非違使事、四〇頁)

## 第五 檢非違使の特質

檢非違使は之を「ケビキシ」と訓む(註一)。元來、「非違」を「<sup>たが</sup>檢」することを目的として設置せられたる「使」なるを以て、之を「檢非違使」と稱するものであるが、又單に之を「非違」とのみ略稱することもある(註二)。さて、檢非違使には廣狹二様の意義の在ること、前述せる如くであるが、以下、檢非違使と稱するは、總て是れ、狹義の檢非違使、即ち諸國檢非違使、神郡檢非違使に對して、京都に設置せられたる檢非違使を指す。

檢非違使の特質に就て考究せらるべきは、(一)檢非違使の大寶令官制上の位置、(二)檢非違使の常置職化、(三)檢非違使の官化。以上の三點に在る。

### (1) 檢非違使の大寶令官制上の位置

檢非違使の大寶令官制上の位置とは、檢非違使が大寶令(註三)に規定せらるゝ中央官制(京官々制)、地方官制(外官々制)の孰れに規定せらるゝや、將又、是等の官制に規定せられざるものなりやの決定である。之に對する結論は、即ち後者にして、檢非違使は令外官(註四)なりと云ふに在る。

檢非違使が令外官なりとは、檢非違使が大寶令に規定せられざる官職なることを云ふ。凡そ王朝時代初期(註五)に於ける國家の統治組織は、總て令に規定せらるゝ神祇官、彈正臺、太政官以下八省諸司の所謂令制官司を

以て構成せられたるものであるが、王朝時代中期（註六）以後に於ける政務執行の實權は、攝政關白以下、藏人所、檢非違使廳、勘解由使廳等の所謂令外官に移り、令制官司は徒らに空名を残すに止まつた（註七）。檢非違使は此の令制官司より令外官への實權移動の過渡期に於て設置せられたるものにして、令の制定に當り、之に規定せられたるものではなかつた。

以上は檢非違使の設置の方面より是れが令外官なる所以を考察せるものであるが、次に檢非違使の名稱それ自體既に令外官たることを示すことも一考を要する。即ち檢非違使は一の「使」なるが故である。「使」の意義に就ては後述するが如くであるが、かくの如く「使」なる名稱を有する者の大部分は、即ち令外官にして、令に規定せられざる官職である（註八）。「使」なる名稱を有して、令に規定せられたる者は唯巡察使あるのみ（註九）。但し令外官にて「使」の名稱を有せざる者も在る（註一〇）。畢竟、「使」の名稱を有する者は、その多くが令外官に屬すべきものにして、檢非違使も亦その一員である。

## （Ⅱ）檢非違使の常置職化

檢非違使の常置職化とは、檢非違使は元來臨時の職として設置せられたるにも拘らず、後には是れが常置の職となれることを云ふ。檢非違使が本來臨時の職名なる所以は、その名稱の示すが如く、檢非違使は即ち「使」なるを以てである。「使」の意義に就ては種々考察せらるゝも（註一一）、王朝時代に於ては、「使」とは即ち勅命若しくは太政官の官命により、臨時に特定の職務を奉じて之を執行すべき者に附せらるゝ名稱である（註一二）。而して此の「使」を命ぜられたる者が、若し既に特定の在官者なる時には、その本官在任の儘にて「使」の職務を執行する。檢非違使亦然り。蓋し檢非違使は衛門府に本官を有する衛門府官人が、非違の檢察を爲すを職務として、臨時に「使」として補せらるゝものなるを以てである。

「使」の職務は臨時的なるを以て、その職務の執行終りたる時には、同時

に「使」の名稱は之を失ふ。檢非違使も亦同様にして、少くとも其の設置當初に於ては、衛門府官人は、その檢非違使の職名を帶び、檢非違使として臨時に非違の檢察を爲し、これが終了したる後は、直ちに檢非違使たる資格を喪ひ、その兼任が解かれる。然るに、後に至つて檢非違使廳なる獨立せる一官府が構成せらるゝに及んでは、之を構成すべき者は檢非違使にして、その構成員たる檢非違使は、衛門府官人たる長官督、次官佐、判官尉、主典志、府生が、所謂「使宣旨」を蒙ることにより補せらるゝことゝなり（註一三）、かくして補せられたる檢非違使は臨時の職たる本來の性質を喪失し、衛府より獨立せる常置の職と化するに至つたのである。

### （III）檢非違使の官化

檢非違使の官化とは、檢非違使は本來、一の職名なるにも拘らず、それが恰も官名の如き實質を具ふるに至れることを云ふ。抑々官と職との區別を認むべきや、又その區別を認むべき時は兩者の本質如何の問題は、別に考察せらるべきものであるが（註一四）、假りに兩者の區別を認むる時には、檢非違使は其の孰れに屬すべきやも遡つて一考を要する所である。

官と職との意義に就ては、その見解も一樣ではないが（註一五）、官職補任の側より見れば、慣例として除目官、宣旨職と稱せられ（註一六）、除目により定時に任ぜらるゝものを官となし（略して之を任官とも云ふ）、宣旨により臨時に補せらるゝものを職となす（略して之を補職とも云ふ）と解される。之によれば、檢非違使は即ち職名である。蓋し檢非違使は衛府官人が所謂檢非違使宣旨（使宣旨）を蒙ることにより、臨時に補せらるゝを以てある（註一七）。又、官位相當（註一八）あるものを官となし、官位相當なくして、且つ大寶令制定以後に設置せられたるものを職となすとの説に従へば（註一九）、檢非違使は即ち職名である。蓋し既述の如く、檢非違使は其の本官たる衛府官人こそ官位相當を有すれ、檢非違使それ自身としては何等の官位相當を有せず、且つ其の設置は大寶令制定以後のことなるを以

てである。而して徳川光圀の大日本史及び新井白石の新野問答の如き、いづれも検非違使を職としてゐる（註二〇）。

以上の如く、検非違使の本質は衛府官人の兼帶する職なるにも拘らず、それが恰も一の獨立せる官の如く見做さるゝに至れる所以のものは、畢竟検非違使の有する職務權限が、司法警察を始めとして、檢察、裁判、行刑乃至は一般警察權に迄も及び、更に検非違使佐、検非違使尉、検非違使志、検非違使府生等の名稱が俗用せられ（註二一）、恰も検非違使に階級別あるかの如くに見做さるゝに至れるを以てである。然し乍ら、検非違使が如何に廣汎なる職務權限を有すると、検非違使は依然として一の職にして、たゞ其の一職が各種の職權を行使するに過ぎない。又、検非違使に階級別在るかの如く見做さるゝは誤りにして、検非違使の長官を特に検非違使別當と稱するの外は、他に何等の階級別無く、検非違使にも佐、尉、志、府生の別あるが如きは、實は検非違使を兼帶する衛門府官人が本官として有するの地位を示すに過ぎない。従つて左右衛門尉の本官を有する者も、左右衛門志の本官を有する者も、それが検非違使に補せらるゝ時には、等しく検非違使なる名稱を帶ぶるに過ぎず、敢て検非違使尉、検非違使志の如き別を生ずるものではない（註二二）。但し廣汎なる検非違使の職權が行使せらるゝに當つては、その職務の種類により、左右衛門佐、左右衛門尉、左右衛門志を本官とする各検非違使間に、その分掌せらるべき職務の内容の異なる所あるは當然である。

註一 <sup>〇</sup>け<sup>〇</sup>び<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>どもかつはなくなくいみじうおもひながら、宣旨のまゝにするにおはせねば、いとあきましきことにて云々。(榮華物語、浦々の別の巻、長徳二年、九七八頁)

註二 藤中納言は衛門督なれど装束きよらにせずとて<sup>〇</sup>ひ<sup>〇</sup>の別當はかけず。(宇津保物語、藏開の上、四一七頁)

これはながされたる、うま車にのりてゆく、こどもゆひ鞍にのりてゆく、<sup>〇</sup>ひ<sup>〇</sup>のじようすけなどしておひやれり。(宇津保物語、あて宮、三七〇頁)

淳和天皇弘仁十四年十一月壬申廿二日。亥刻。巡大藏舍人等呼失火於大藏省。(中略)優婆塞三人。藏部一人。親入盜物。(中略)優婆塞降非違禁固。藏部降囚獄着駄。(類聚國史、卷一七三、災異七、火、一七八頁)

此日御體綿々。事極屬續。諸名僧等持呪誓願。五輪投地。不暫休息。左右  
 檢非違使。獄中人。除盜之外。悉從放免。(續日本後紀、卷二十、嘉祥三年三月十六日甲午條、二三・七頁)

愛信房近江國領所者。去比被付非違當家領於云々。(吾妻鏡、卷八、文治四年五月十七日壬子條、前篇、二九八頁)

尙、特例ではあるが、次に掲ぐる「檢比師」も恐らく鹿島神宮に隸屬せる神郡檢非違使の別名であらう。

鹿島御神領

一三石

檢比師

文祿四年乙未八月十七日

(鹿島神宮古文書、古事類苑、官位部、第二冊、一〇二頁)

註三 今日、我々が大寶令と稱するものも、實は現存せる養老令に外ならぬことは周知の事實である。

註四 令外官とは令の官制に規定せられざる官職を云ひ、二種の系統がある。その一は大寶令制定以前に於て既に其の官職の設置あるにも拘らず、大寶令制定當時、一時その機能が中絶停止せられ、令の制定後に再び其の機能を復活せる官職にして、之を例へば内大臣、中納言等の如きものである。その二は令の施行後に於て、政治の實際上の運用の必要から、臨時の格により特別に新設せられたる官職にして、通常令外官と云へば之を指す。例へば藏人所、勘解由使廳、檢非違使廳等の如きものである。

註五 王朝時代初期とは、大體に於て、大化改新より奈良朝末期まで(1305—1441)を云ふ。

註六 王朝時代中期とは、大體に於て、平安朝初期より天慶の亂まで(1442—1602頃)を云ふ。

註七 令制の官司官名は單に朝廷に於ける一種の名譽職の記號の如きものに過ぎなくなつた。法學博士瀧川政次郎氏は、この現象を稱して令制官司の位階化と名付けて居られる。(同氏「日本法制史」一一〇頁)

**註八** 例へば觀察使、按察使、征夷使、遣唐使、班内史、賑給使、防鴨河使、押領使、修理宮城使、防河使、造寺使等である。

**註九** 令義解、卷一、職員令、三一頁。

但し巡察使は大寶令制定以前の持統天皇八年七月に、始めて地方に派遣せられたるものにして、令の制定により新設せられたるものではない。之に依つて「使」の名稱が大寶令制定以前に於ても、既に存在せしことが知られる。

**註一〇** 例へば内大臣、中納言、參議、藏人等である。

**註一一** 命じて行ひ爲さしむること、即ち人をつかふ義、故に人に吏を合す、更に事を取る人なり、轉じてつかひ、即ち命を受けて出でて事に當る人の義とす。(大字典、大正六年版、一〇二頁)

古へ使を奉じて巡行する官、又、事あるに臨みて、一時、設けらるゝあり、同等の官を長官、次官、判官、主典とす、觀察史、按察使、防鴨河使、修理宮城使、防河使、造寺使等あり。(大言海、卷二、昭和八年版、一一七頁)

**註一二** 詔使、官使と稱せらるゝ者、即ち是れである。

**註一三** 檢非違使。但別當以下爲宣下職。爲衛府之人補之。(職原鈔、下、六四三頁) 佐二人。爲左右衛門權佐者蒙使宣旨。(職原鈔、下、六四四頁)

**註一四** 説文によれば官は「吏事君也」と見え(説文解字眞本、説文解字第十四上、文政九年官板、第九冊、一五頁)、事を掌る者が君に事ふること、君主に奉仕する役儀を以て官の本義となし、又職は「記微也、(中略)國有六職皆主記事之微也、」と見え(説文解字眞本、説文解字第十二上、文政九年官板、第八冊、七頁)、事を職掌することにして、己が役儀の事を些細に引請けて職分とすることを以て職の本義としてゐる。

「官猶事也」、「官法也」。(令集解、卷一、官位令、一頁)

「職主也」、「職掌也」、「職者職掌也」。(令集解、卷二、職員令、二三頁)

「職猶云官者」「職猶言官也」、「職猶官也」。(令集解、卷二、職員令、二三頁)  
謂大臣以下。書吏以上。曰官。(令義解、卷一、官位令、五頁)

謂職者。職司也。(令義解、卷一、職員令、二七頁)

**註一五** 新しき見方としては一特に現行官吏法に謂ふ所の官と職との意義に於ては、或は官職を一括して、之を官吏の擔任すべき職務の範圍に一定の名稱を附して指示せるものとなし、或は官名、職名を區別して、官名は唯職務の一

般的の種類を示すに止まり、職名は現に擔任すべき職務の範圍を指示するものと解する。この區別は終身官に就ては殊に必要なりとして、美濃部博士は之を「何トナレバ終身官ハ終身其ノ官ヲ保有スル者ナリト雖モ、終身職務擔任スルコトハ不可能ナレバナリ。故ニ例ヘバ官名タル判事ノ外ニ某控訴院長、某地方裁判所判事ト謂フガ如キ職名ヲ區別シ、官名タル陸軍中將、海軍大佐ノ類ノ外ニ某師團長、某艦長ト謂フガ如キ職名ヲ區別ス。現職ニ在ラザル官吏ハ唯官名ヲ保有スルノミ職ヲ擔任セズ云々。」と述べられてゐる（同氏「行政法提要」、上巻、三二九—三三〇頁）。尙、註一四に示す説文の官及び職の字義も亦、大體之に類似する所が見出されよう。

**註一六** 除日官與宣旨職分別可有哉。（政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五三三頁）

**註一七** 檢非違使。天長年中。准唐朝置使廳。（中略）但別當以下爲宣下職。爲衛府之人補之。（中略）佐二人。爲左右衛門權佐者蒙使宣旨。（中略）志。明法道輩六位時任衛門志。即蒙使宣旨也。（職原鈔、下、六四三一—四頁）

宣旨職謂者。若如檢非違使也。（政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五三三頁）

**註一八** 位階と官名とは密接なる關係があり、位階を主として、之に依つて官を授與せられる。依つて位階と官との相當を規定して、之を官位相當と云ふ。例へば太政大臣には正從一位の者、左右内大臣には正從二位の者、大納言には正三位の者、中納言には從三位の者が、それぞれ相當して任官される。從つて通常位階と官とを連ねて稱する場合には、之を例へば、正三位大納言、從三位中納言とする。然るに官位の相當せざる場合、例へば官が高く、之に相當すべき位階の低い場合には、位階を上記し、「守」と云ふ字を間に入れて、次に官名を記すことになつてゐる。此の場合には「守」とは「シユウ」と延音して讀むのが慣例である。從三位守大納言何某と云ふが如きである。之に反して、位階が高く、之に相當すべき官の低い場合には、「守」の字の代りに「<sup>きやう</sup>行」の字を入れる。從二位行權大納言何某と云ふが如きである。（官職難儀、七一—三頁）

**註一九** 文學博士和田英松「修訂官職要解」二頁。

從つて内大臣、中納言の如きは、令に其の設置なく、令外官に屬するか、いづれも官位相當を有し、正從二位内大臣、從三位中納言と云ふのであるから、



これは官名であり、職名ではない。

**註二〇** 嵯峨帝即位。以巨勢朝臣野足。藤原朝臣冬嗣爲藏人頭。又置檢非違使。二職始此。(大日本史、卷二八〇、職官志一、第十冊、三〇五頁)

一、檢非違使とは官にて候哉、職にて候や、答、職の名にて候云々(新野問答、古事類苑、官位部、第二冊、一〇三頁)。但し明治四十年刊行の新井白石全集、第六所収の新野問答(同書、五五四—六一七頁)には此の記事が見えぬ。暫く古事類苑所収による。

**註二一** 第六章、第一、参照。

**註二二** 第六章、第一、参照。

## 第二章 檢非違使廳

### 第一 檢非違使廳の意義

既述の如く、諸國檢非違使は國司に、府檢非違使は大宰府に、神郡檢非違使は伊勢及び鹿島香取の兩神宮に、それぞれ隸屬するものであるが、之に對して檢非違使の構成する官府を檢非違使廳と云ふ。檢非違使廳は別名、<sup>いげひのちやう</sup>之を靱負廳、廳底とも云ひ（註一）、又單に略して使廳とも云ふ。（註二）檢非違使廳は廳政を執行し、廳務を管掌する獨立常置の特別地方行政府である。

#### （Ⅰ）廳政執行 廳務管掌

檢非違使廳は廳政を執行し、廳務を管掌する行政府である。こゝに廳政とは、檢非違使が其の職權行使により具體化せらるゝ一切の政事を云ひ、廳務とは、廳政執行に關する一切の事務を云ふ（註三）。次に檢非違使廳が行政府なりとは、檢非違使の職掌は多岐に互り、警察、檢察、裁判、行刑の各方面に及ぶものなるも、司法と行政との觀念が分離せず、司法も行政の一部たりし此の時代に於ては、檢非違使が是等の廣範圍に及ぶ刑事司法權を行使するも、尙且つ之を行政の範疇に屬せしむるが妥當なる見方であらう。この意味に於て、檢非違使廳は行政府なりと云ふのである。

#### （Ⅱ）獨立常置

檢非違使廳は獨立常置である。檢非違使廳が獨立なりとは、檢非違使が常に衛府官人の兼職なるにも拘らず、檢非違使により構成せらるゝ檢非違使廳は、衛府とは全然獨立せる官府なるを云ひ、又、檢非違使廳が常置なりとは、檢非違使が本來衛府官人の臨時の兼職すべきものなるにも拘らず、この檢非違使の構成する檢非違使廳それ自體は、臨時設置の官府に非ずし

て常置の官府なるを云ふ。檢非違使廳を構成する職員の主なるものは、原則として、衛府官人にして檢非違使を兼ねる者なるが、檢非違使は其の設置當初こそ、衛府官人の兼任する臨時の職名に過ぎざりしも、衛府官人が帶劍の武官にして實力を有せること、及び京都市中の治安の紊亂せるに就き、大いに其の實力を行使して治安維持に努めたることにより、後述する如く、仁明天皇承和元年（834）には、衛府官人の兼任せる長官別當、次官佐、判官尉、主典志の所謂四等官に類する職員が配置せられ、こゝに衛門府より獨立せる檢非違使廳の構成を見るに至つた。之に加ふるに、檢非違使の權限の擴大化は、遂に京都市中の檢察、裁判、行刑に關する一切の刑事事件に及び、職原鈔の著者たる北畠親房をして、「朝家此ノ職ヲ置キテ以來、衛府ノ追捕、彈正ノ糾彈、刑部ノ判斷、京職ノ訴訟、併セテ使廳ニ歸ス。」と云はしむるに至つた（註四）。實に檢非違使廳は、その構成員たる檢非違使こそ衛府官人の兼任する所であり、非違の檢察を本來の職掌として臨時に設置せられたる一の「使」に過ぎざりしが、既述の如く、この檢非違使自體が既に本來の意義を脱し、形式的には衛府の兼官にして而も實質的には兼官に非ず、形式上は臨時官にして而も實質上は臨時官に非ず、既に檢非違使なる獨立常置の本官の性質を有すると何等異ならざるに至れるを以て、これが一體となりて構成せらるゝ檢非違使廳は、全く衛府より獨立せる常置の行政府たるの形態を爲すに至つた。

### （Ⅲ）特別地方行政府

檢非違使廳は特別地方行政府である。檢非違使廳の管轄區域は、後述するが如く、通常、京都を中心として、その近傍たる山崎、與渡、大井、津頭等にして（註五）、その權限の行使區域は一定の制限を受け、太政官及び八省の如く、全國に其の權限が及ぶべきものではない。檢非違使「廳」と稱し（註六）、「省」號を採らざる所以である（註七）。而して檢非違使廳の設置は、從來、京都市中に警察、檢察、裁判、行刑の各方面に關して管轄權

を有したる京職、衛府、刑部省、彈正臺等の諸官司の權限をして、著しく縮少するの止むなきに至らしめたることは、前述の職原鈔の云へるが如くなるを以て、檢非違使廳は其の有する權限並に權限の行使區域に就き、是等の令制諸官司に對して、全く特別なる地位を有するものと云はねばならぬ。この意味に於て、檢非違使廳は特別地方行政府なりと云ふ。

註一 仁安二年四月廿三日庚寅。今日<sup>〇</sup>靱負廳<sup>〇</sup>。年始政始云々。于今懈怠。廳底<sup>〇</sup>陵遲之基也。(山槐記、第二冊、四五頁)

檢非違使廳を靱負廳とも云ふのは、最初檢非違使に關する事務を管掌せる衛門府を靱負府とも云へるが故であり、(檢非違使。本所乃靱負廳也。職原鈔、下、六四三頁)、又廳底の「底」とは官司の意である。

註二 檢非違使。此云使廳<sup>〇</sup>。(職原鈔、下、六四三頁) 通常、檢非違使廳と正式に稱する場合は公文書に記載する場合以外は稀にして、殆ど之を單に「使廳」と稱する。「使廳」の名稱を有するものは、この外に勘解由使廳があるが、單に「使廳」と云へば、それは檢非違使廳を指す。徒然草に「この法師を捕へて、所より使廳へ出したりける、」とあり(徒然草、一六二段、一〇四頁)、又「徳大寺右大臣殿、檢非違使別當の時、中門にて、使廳<sup>〇</sup>の評定行はれける程に云々」と見えてゐるのは(同書、二〇六段、一二九頁)、いづれも檢非違使廳を指す。

註三 但し古くは、この廳政、廳務の兩意義は嚴密には區別せられざりしものゝ如くである。即ち廳務も廳政を意味せるものゝ如く、古今著聞集、卷十二、偷盜(二五七頁)に、「今は使廳<sup>〇</sup>の廳務停止したるなり、かつは聞も及ぶらん年ごろ作りおける樓もみなうちやぶりて佛殿につくりなをして一向廳務をとゝめ後世の事をいとなむ也。」とあるの「廳務」は、本文の前後より推して「廳政」の意である。而して「廳政」は或は之を「政」とのみ云ひ、「廳政執行」を「政を行ふ」とも云へるは、次の事例により知ることが出来る。

私案。行政<sup>〇</sup>之制。雖立每日之法。章條之中。亦多可避之時。所謂散齋之内。不判刑殺。不決罪人類也。但近代之例。至于祭月。諸祭以前。不行廳政<sup>〇</sup>云々。(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五二六頁)

別當中納言從三位源朝臣光宣。奉勅。左右檢非違使等。行政之日。免不

直彈之責者。

寛平八年十月十一日

左衛門權佐源朝臣實 奉

(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五二八頁)

**註四** 檢非違使。此云使廳。(中略) 朝家置此職以來。衛府追捕。彈正糾彈。刑部判斷。京職訴訟。併歸使廳。(職原鈔、下、六四三頁)

**註五** 使式云。近京之地及山崎與度大井等津頭。使等糾察非違者。(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五三一頁)

**註六** 「廳」の字義に關しては、康熙字典に「廣韻也。廳屋也。集韻。古者治官處。謂之聽事。後語省。直曰聽。故加广。增韻。聽事。言受事察訟。於是漢晉皆作聽。六朝以來乃始加广。」と見えてゐる。(康熙字典、寅集下、文久三年刊本、第十三冊、三二丁表)

即ち「廳」なる字は、家屋を意味する「广」と、人民の訴を審かに聞くことを意味する「聽」との合併により成るものにして、人民の訴を聴き、政治を行ふの府との意である。

**註七** 蓋し「省」は大寶令に於ては、太政官下に於て、其の權限の全國に及べる八省のみが之を有する名稱なるを以てする。八省に對する檢非違使廳の關係は、現今の内務省及び司法省に對する警視廳の關係に類似する所がある。

## 第 二 檢非違使廳の地位

檢非違使廳の地位とは、王朝時代の國家統治組織中、檢非違使廳が占むる地位を云ふ。之に就ては、(一) 檢非違使廳長官の地位より觀たる檢非違使廳の地位、(二) 檢非違使廳令より觀たる檢非違使廳の地位。以上の二點に立脚して考察する。

### (I) 長官の地位より觀たる檢非違使廳の地位

檢非違使廳の長官は即ち檢非違使別當にして、太政官の參議以上、通例は中納言を以て之に親補せられ、必ず左右衛門督、又は左右兵衛督の地位に在る者を以てする(註一)。衛門府、兵衛府の長官たる衛門督、兵衛督の位階は通常從四位下にして、太政官下の各省(但し中務省を除く)長官た

る卿の位階が通常正四位下なるに比較すれば（註二）、其の下位に在る。而して八省中、中務、式部、兵部三省の長官卿は必ず親王を以て任ぜられ、治部、民部二省の長官卿は大納言、中納言を以て之に任じ、刑部、大藏、宮内三省の長官卿は參議を以て之に任ずるの慣例である（註三）。而して檢非違使廳の長官別當は通常中納言を以て之に補し、大納言に昇進するに際しては之を辭するの慣例なるを以て（註四）、是等の關係より觀る時は、檢非違使廳は長官の位階に關する限り、治部、民部と刑部、大藏、宮内との間に介在するものと見ることが出來よう。従つて、檢非違使廳の地位はほぼ太政官下の八省と同格なるも、その長官の名稱が八省の卿に對して別當と稱すること、竝に前述せる如く、衛府、刑部、彈正、京職等の職掌を併有するに至れる其の特殊機能とにより、檢非違使廳をして單に八省と同列に立たしむることは困難なるを以て、太政官下の各省に對する地位は、現今の各省下の部局に對する所謂省外部局の如き關係の地位に在りと爲すを以て適當と考へる。而して檢非違使廳長官別當の命令たる別當宣は、之に違背する者は違勅の罪を以て處斷せらるゝ程の權威あるものなれば（註五）、之を以ても、如何に檢非違使廳の重んぜられたるかを窺ふことが出來よう。

## （Ⅱ）廳令より觀たる檢非違使廳の地位

さて後に詳述する如く、檢非違使廳より外部に發する通牒たる廳令は、凡て別當宣によつて其の發令を命ぜらるゝものであるが、その廳令は相手方が他の官司なる場合と然らざる場合とにより、その形式を異にする。後者の場合は、多くは個人であるが、この場合には下文、或は下知狀の形式を以てすることが多い。前者の場合には所謂「移」の形式を以てせらるゝこと、實例の示す所である。元來、この「移」に就ては、唐六典によれば、諸司自ら相質問する形式として、關、刺、移の三者を示し、その中、移は「其事ヲ他司ニ移ス」を謂ふとしてゐる（註六）。この流れを引く我が公式令に於ても、「移」は八省以下の内外諸司が、相互に對等の地位なる場合に

於て使用するものとしてゐる（註七）。而して此の「移」を發し得る場合の相手方は、八省相互間、或は同一省内に於ける地位の同等なる諸司相互間に於てのみである。然るに檢非違使廳は令外官にして、令制官司の如く、令の中に其の位置が規定せられざるために、之に對等なる同階級の官司が如何なるものなるかは、極めて不明確である。然し檢非違使廳の發する文書に就て事實を見るに、檢非違使移は地方行政府たる國衙宛に出されてゐることが知られる（註八）。

その他、檢非違使は太政官に解を上り、太政官よりは檢非違使へ官符を下せる實例を多數見らるゝを以て（註九）、檢非違使廳を中心とする「解」、「符」、「移」の文書の格より考察して、檢非違使廳は官司としての地位は地方行政たる國衙と同等であつたとも見られるが、然し何分令外官なると、及び前記の解状や官符が天慶以前の前期王朝時代のものなるに反し、既述の「移」はそれより二百年後のことであり、時代も令制官司時代より令外官時代へと變遷せるを以て、單に是等の文書の格式のみを以て、檢非違使廳の地位を斷定することは出来ない。

**註一** 別當一人。參議以上。尤擇其人也。補此職之人。必帶衛門兵衛督。（職原鈔、下、六四三頁）

檢非違使。別當。中納言參議中爲公達衛府督撰人補之。（官職祕鈔、下、六一四頁）

**註二** 職原鈔、上、六二四頁、六二八頁、六三〇頁、六三一頁、六三二頁、六三三頁、六三四頁、六三五頁、六五三頁。

文學博士和田英松「修正官職要解」二五〇頁。

**註三** 八省卿。中務。式部。兵部。以上。必以親王任之。（中略）治部。民部。已上。必爲大中納言。（中略）刑部。大藏。宮内。已上。爲參議散三位四位官。宮内卿或爲大中納言兼官。（官職祕鈔、上、五九四頁）

**註四** 仍至大納言帶此職。近代又未聞事也。仍中納言大理。任大納言之日。必去其職。是流例也。（職原鈔、下、六四三頁）

- 註五 又別當宣者即廳宣也。古來被准勅宣。仍天下重之。違背廳宣者。可准違勅云々。(職原鈔、下、六四三頁)
- 註六 諸司自相質問。其義有三。曰。關。刺。移。(關。謂關通其事。刺 謂刺舉之。移。謂移其事於他司。移則通判之官皆連署。)
- (唐六典、卷一、天保七年官板、第一冊、一〇頁裏)
- 註七 右八省相移式。内外諸司。非相管隸者。皆爲移。(令義解、卷七、公式令、二二二頁)
- 註八 朝野群載、卷十一によれば、大治四年三月に山陽南海兩道の國衙に、この移が出されてゐる。(二二六頁)
- 尙、第六章、第五、(IV)、参照。
- 註九 類聚三代格、政事要略、類聚符宣抄、朝野群載等に之を見る。

### 第三 檢非違使廳と諸官司との比較

#### (I) 檢非違使廳と令制官司

檢非違使廳の設置は、後述するが如く、京都に於ける刑事司法竝に警察に關する令の制度に一大變化を招來せしめた。即ち衛府の犯人逮捕、彈正臺の糾彈、刑部省の裁判、京職の訴訟受理等、令に規定せられたる律令の刑事司法竝に警察の制度が、諸官司分掌制より一官司綜掌制へと變化し、檢非違使廳は是等の各官司の權限を漸次奪取すると共に、之を統轄綜合して一官司萬掌の傾向を作るに至つた。職原鈔は之を「朝家此職ヲ置キテ以來、衛府ノ追捕、彈正ノ糾彈、刑部ノ判斷、京職ノ訴訟、併セテ使廳ニ歸ス。」と云ひ(註一)、就中、彈正臺に就ては「近代其ノ職掌ハ檢非違使廳ニ移ル云々」と述べて(註二)、糾彈權の檢非違使廳に移れることを指摘し、刑部省に就ては「斷獄刑法及ビ諸訴訟ハ當省ノ掌ル所ナリ。本朝先例此ノ如シ。然リ而シテ檢非違使ヲ置カセラル、ノ後ハ、刑部ノ職掌名有リテ實無シ。但シ贖銅等ノ罪ヲ行フノ時ハ、當省ニ移スナリ。」と述べて(註三)、裁判竝に行刑の實權は、贖銅に關する罪の外は凡て檢非違使廳に移れることを示し、更に京職に就ては「京中ノ事ヲ掌ル。昔ハ宅地以下悉ク京職ノ知ル所ナリ。近



代ハ檢非違使廳ニ移ル。」と述べて（註四）、地方行政府たる京職の權限が檢非違使廳に移れることを示してゐる。

是等の令制の諸官司と檢非違使廳との職務關係に就ては、第五章に於て詳述するが如くであるが、次に檢非違使廳と令外官中の主なるもの、即ち藏人所及び勘解由使廳とに就ての比較を略述し、以て檢非違使廳と他官司との地位を比較考察することとする。

## （Ⅱ）檢非違使廳と藏人所

檢非違使廳と藏人所とは、共に令外官中の最重要なるものとして、その權威は令制官司を壓倒し、前者は京都を中心として刑事司法方面に、後者は宮廷を中心として朝廷政務方面に、共に其の實權を振へるものであるが、その設置竝に權限擴張の經路に於ても、頗る相通する所がある。

藏人所は嵯峨天皇の弘仁六年（810）、禁中の校書殿に在る機密文書の保管を主たる職務として設置せられたるものであるが（註五）、これは同じく弘仁年間に、京都市中の非違檢察を主たる職務として設置せられたる檢非違使と共に、平城、嵯峨兩天皇の御代たる大同、弘仁年間に斷行せられたる行政機構の改革——太政官制度下に於ける令制官司の廢合及び令外官の新設の一例とも見られる。藏人所の新設により、太政官下の中務省及び小納言局の職掌が有名無實となり、その機能が停頓するに至れることは、藏人所が宣旨なる形式を採る勅令の頒布手續を管掌せるが故である。元來、令の規定する所では、詔書及び勅旨の傳宣は、中務省及び少納言局の管掌する所にして、公式令の規定する詔書及び勅旨の頒布手續は實に鄭重、繁雜を極めた（註六）。併し乍ら、政務は大小となく詔勅の頒布を俟つて執行せらるゝ以上、常に斯く繁雜なる手續を経ることは、國政の圓滑なる運用を期するためには非常なる障害であつた。従つて平安朝初期に入りてより後は、詔勅の頒布は稀有のこととなり、通常、天皇の御畫日、御畫可、御親署もなく、單に勅令を蒙れる上卿の名によつて發せらるゝ宣旨が、詔勅

に代りて行はるゝに至つた。藏人所の掌れるものは、即ち此の宣旨の頒下手續にして、加ふるに天皇の側近に奉仕せるが故に、藏人が政治の實際に參與するに至り、宇多天皇の寛平年間(889—897)には、政務の執奏、詔勅の傳宣は元より、禁中の禮儀、節會の儀式、御物の保管、殿中の日記等、凡て宮中の日常政務一切を執行するに至つた(註七)。従つて、從來是等の諸事を管掌せる中務省及び少納言局は全く有名無實となり、加ふるに藤原氏が擅政の一手段として、その一族權臣を藏人所の長官別當に補するに及んでは、藏人所の威力は國家最高行政官府たる太政官を壓倒するに至つた(註八)。

檢非違使廳は本稿に於て詳述する如く、嵯峨天皇の弘仁年間に新設せる檢非違使を一體として、之により構成せらるゝ警察、檢察、裁判、行刑を管掌する行政府である。その初め、非違の檢察、主として盜賊その他の犯罪者の逮捕を職務とする司法警察官として設置せられたる檢非違使が、後に至つて、巡察、糾彈、勘問、聽訴、囚禁、斷罪、行決、免囚、收贖等(註九)に關する京都に於ける一切の刑事司法權及び警察權を獨占し、從來、是等の諸權を有したる令制の諸官司をして無能ならしむるに至つた。これは畢竟するに、藏人所が天皇の側近に奉仕せるが故に、いつとはなく政治の實際に關與するに至れると同様、檢非違使廳も檢非違使が其の初め、犯人の逮捕を職務とせるが故である。蓋し上述せし諸權の如きは、いづれも犯人の逮捕を俟つて始めて行使せらるゝものにして、従つて、如何に彈正臺が彈劾するも、將又、京職が不法侵害の訴訟を受理するも、又、刑部省が如何に裁判所として、將又、行刑の府として存在するも、若し一犯人の逮捕無かりせば、何等施す所無きものと云はねはならぬ。檢非違使廳の實權が刑事司法及び警察を掌れる令制官司を壓倒するに至れる端緒は、實に此の犯人の逮捕を職務とする司法警察官たるの地位を有せしに因る。

かくの如く、檢非違使廳と藏人所とは、共に其の初め、一の些少なる職務を有する令外官に過ぎざりしが、これが後には強大なる實權を掌握して

令制の諸官司を壓倒し、前者は刑事司法竝に警察機關として、後者は宮中政務の執行機關として、王朝時代に於ける令制官司に代る令外官の代表的存在をなすに至り、こゝに大寶養老の制度の中心が一變するに至つた（註一〇）。

### （Ⅲ）檢非違使廳と勘解由使廳

檢非違使廳と勘解由使廳とは、その兩者の間には職務權限等に就ては何等の關係もないが、その沿革に於て種々の異同が對照せられる。

檢非違使及び勘解由使の兩者は、共に所謂「使」の名稱を帶び、その設置は臨時派遣に端を發し、後に至り獨立常置の官職となり、それぞれ檢非違使廳及び勘解由使廳を構成するに至つた。又一面より見れば、檢非違使は衛門府官人の兼任する所にして、官位相當なく、その本質は職なるに反して、勘解由使は他官の兼任する所に非ずして、勘解由使それ自體が獨立の本官にして、從つて官位相等を有し、その本質の官なることは、公卿補任竝に類聚三代格所收の太政官符によつても之を知ることが出来る（註一一）。

勘解由使は元來、中央政府の地方行政官に對する監察機關として設置せられたるものなるが、その創設年代は桓武天皇の延暦十五、六年の頃と推定せられる（註一二）。この創設年代の不明確なる點は後述の如く檢非違使と同様であるが、後に獨立常置の官として再設置せられたる勘解由使は、天長元年（824）九月十日附の太政官符により復活せしめられたるものにして、この太政官符には勘解由使の官位も規定せられた（註一三）。のみならず、類聚國史によれば、同日、又別に勘解由使の定員も四等官以下規定せられたるを以て（註一四）、勘解由使廳の制度は此の時既に完成せられたるものにして、後述の如く、檢非違使廳の廳員組織の完成するに至る經路とは、全く其の趣を異にしてゐる。

勘解由使の設置は、元來太政官が間接に國司在任中の職責を監察せんこ

とを目的とするものにして、國司の交替に際して、新任國司より前任國司に對して、庸調の未進、官物の缺損等の公事懈怠の有無を調査して附與する解由狀、又は之を附與せざる場合の理由書たる不與解由狀の當否を勘判することを職務とするに在る。天長元年（824）、勘解由使廳の組織が規定せられてより後は、太政官の地方行政官たる國司に對する監察方針が一變し、従前の如き、朝廷より監察官を派遣するが如き方針を捨て、専ら京都に於ける勘解由使廳に、解由狀、不與解由狀の當否判斷の權を附與することにより、之に代へるに至つた。この監察方法は地方行政官たる國司のみに限らず、廣く一般諸司にも準用せらるゝに至り、特に不與前司解由狀、令任用分付實錄帳、檢交替使帳等の勘判に與かり、勘解由使廳は監察官廳としての顯職（實務と實權とを併有する官職）を誇るに至つた（註一五）。この監察政策が果して効果を挙げ得たるや否やの検討は、こゝには論及せざるも、この天長以後に於ける監察制度の確立は、檢非違使廳の設置が律令の司法制度を一變せしめ、檢非違使廳の所謂廳例に基礎を置く司法制度を新たに樹立するに至れると同様に、王朝時代に於て、政治上竝に法制上に一轉換を招來せしめたるものであつた。

註一 朝家置此職以來。衛府追捕。彈正糾彈。刑部判斷。京職訴訟。併歸使廳。  
（職原鈔、下、六四三頁）

註二 掌糾彈事。近代其職掌移檢非違使廳。（職原鈔、下、六三八頁）

註三 斷獄刑法及諸訴訟當省所掌也。本朝先例如此。然而被置檢非違使之後。刑部職掌有名無實。但行贖銅等罪時移當省也。（職原鈔、上、六三三頁）

註四 掌京中事。昔者宅地以下。悉京職之所知也。近代移檢非違使廳。（職原鈔、下、六三九頁）

註五 弘仁元年三月十日。始置藏人所。令侍殿上。當機密文書及諸訴。（標註職原抄校本別記、卷之下、皇學叢書本、四八一頁）

註六 公式令の規定する詔書の頒下手續は、凡そ次の如くである。

先づ少納言局の内記、草案を作成し、之を中務省に於て審議し、可決せる

ものを上奏する。天皇之を可と認め給ふ時は御畫日と稱して、草案作成の年月日中の日の數字のみを御親署せられて、更に之を再び中務省に差下さる。中務省に於ては卿、大輔、少輔、いづれも之に副署をなし、更に少輔自ら別に寫本一通を作成し、原本を中務省に所藏し、この寫本を太政官に廻付する。太政官に於ては、四名の大納言が此の寫しによる詔書の草案に位姓名を連署して、再び天皇に覆奏する。天皇之を御裁可せらるゝ時は、御畫可と稱して最後の所に「可」の字を御親署せられ、之を更に太政官に差下さる。太政官に於ては之を又一通寫して、「可」の御畫可のあるものを太政官に於て保存し、その寫本を以て外部に公布すべき詔書とする。而して在京諸司に對しては、各諸司毎に一通宛の寫本を作成し、之に太政官符を削へて頒布し、諸國に對しては、その詔書の主旨を太政官符の中に收録して頒布する。

以上が詔書の頒布手續であるが、勅書のそれは、これより少しく簡略である。蓋し詔書は臨時の大事に、勅書は尋常の小事に用ひらるゝを以てである。

尙、詳細は令義解、卷七、公式令、(二一〇——一二頁)参照。

**註七** 法學博士瀧川政次郎氏「日本法制史」一一一頁。

これは藤原時平が初代の藏人所長官たる藏人所別當に就任せし時よりである。

**註八** 標註職原抄校本別記、卷之下、皇學叢書本、四八二頁。

**註九** 古事類苑、官位部二十七の分類による。

**註一〇** 然自弘仁置藏人檢非違使。而侍從衛府彈正諸職。漸失其權矣。(大日本史、卷二百八十、職官志一、第十冊、二九四頁)

初嵯峨帝置藏人。而少納言侍從失其職。置檢非違使。而彈正衛府刑部京職。皆失其權。大寶養老之制始弊矣。(大日本史、卷二百八十、職官志一、第十冊、三〇七頁)

大抵延喜天曆以降。政歸相家。内之藏人。外之檢非違使。權勢最盛。大寶之制。於是一變矣。(大日本史、卷二百八十二、職官志一、第十冊、三七二頁)

**註一一** 淳和天皇天長五年。參議從四位上。小野峯守。二月九日任勘解由使長官。

(公卿補任、經濟雜誌社版、國史大系、第九卷、一〇一頁)

太政官符

## 置勘解由使事

右檢參議彈正大弼從四位下橘朝臣常主奏稱。件使延曆年中置之。大同年中廢之。自今以後。交替之政不被□□□。右被右大臣宣稱。奉勅。宜件依爲定。其官位。依延曆十七年七月廿日格。

天長元年九月十日

(類聚三代格、卷四、廢置諸司事、一四九頁)

**註一二** 勘解由使は巡察使の廢止に次いで派遣せられたるものなるが、巡察使の廢止は延曆十四年にして(日本紀略、前篇十三、延曆十四年八月卅日甲午條、二六九頁)、又公卿補任によれば、延曆十六年九月四日、參議正四位下藤原内膳が勘解由長官を兼任せることが見ゆるを以て(經濟雜誌社版、國史大系、第九卷、七五頁)、勘解由使の設置年代は此の間であらうと推量される。

**註一三** 天長元年九月十日太政官符、置勘解由使事、(類聚三代格、卷四、廢置諸司事、一四九頁)。尙、註一二、參照。

**註一四** 淳和天皇天長元年九月乙卯。定勘解由使員。長官一員。次官二員。判官三員。主典三員。史生八員。(類聚國史、卷百七、官職十二、勘解由使、八一頁)

**註一五** 凡勘内外諸司所進不與前司勘由狀。令任用分付實錄帳。檢交替使帳等者云々。(延喜式、卷四十四、勘解由使、九四五頁)

## 第三章 檢非違使の設置

### 第一 檢非違使の設置

#### (I) 檢非違使の創設と史料

檢非違使の創設せられたる年代は、一般には明確ならざるも、恐らく嵯峨天皇の弘仁年間（810—823）ならんと推測される（註一）。檢非違使創設年代の不明確なる所以は後述する所なるも、而も尙、その創設年代が弘仁年間ならんと推測せらるゝ理由は、次の如き史料に因るものである。

一 從四位下治部大輔興世朝臣書主卒ス。

<sup>フミツシ</sup>書主右京ノ人ナリ。（中略）書主人ト爲リ恭謹、容止觀ル可シ。（中略）

弘仁七年二月轉ジテ左衛門大尉ト爲リ、檢非違使事ヲ兼ネ行フ。（文德實錄）（註二）

國の正史の上に、最も早く檢非違使なる名稱の現れたるは、即ち此の文德實錄所收の興世書主<sup>まさよふみぬし</sup>の傳に於てである。但し此の史料を以てしては興世書主が左衛門大尉にして檢非違使を兼任せしものとは遽かに斷じ難い。蓋し「檢非違使事ヲ兼ネ行フ」とあるを以てである。然し之を以て弘仁七年には、既に檢非違使の存存せしことは確實であると解することが出来る。

一 弘仁八年九月廿三日。中納言藤原朝臣冬嗣。奉 勅。私ニ鷹ヲ飼フハ頃年禁斷シテ已ニ久シ。而シテ今ニ諸人、公驗有ルナク、制ニ乘リ恣ニ養フ。宜シク看督（長）ニ仰セツケ、嚴シク禁察セシムベシ。

（政事要略）（註三）

この政事要略所收の弘仁八年九月廿三日の宣旨に、檢非違使の部下たる看督<sup>かどのをさ</sup>長の名が見えたることは注目すべきことである（註四）。

一 弘仁十一年十一月廿五日。太政官符。（前略）望請スラク左京官人ハ

位祿季祿ヲ抑留シ、雜色人ハ檢非違使ヲシテ催徴セシム。(中略) 又  
宣旨ヲ檢非違使ニ下シ云々。(類聚三代格) (註五)

- 一 弘仁十一年十二月十一日。宣旨。

檢非違使掌ル所ノ事、彈正ト同ジ。臨時ノ宣旨モ亦之ヲ糺彈スルモ  
ノナリ。(類聚三代) (註六)

- 一 弘仁十二年十一月廿日。宣旨。

右大臣宣。檢非違使等ノ政ニ縁リ、外記ヲシテ傳申セシムル有ルハ、  
宜シク狀ニ隨ヒ申スベキモノナリ。(類聚符宣抄) (註七)

- 一 弘仁十三年二月七日。太政官符。

應ニ罪人ノ配役年限ヲ定ムベキ事。

右檢非違使解<sup>イ</sup>稱ク云々。(類聚三代格) (註八)

以上、列擧せる諸史料の如く、檢非違使に關する太政官符或は宣旨が、  
弘仁十一年以後に於て屢々發せられてゐる關係上、是等を綜合して考ふる  
に、檢非違使の確かなる創設年代は別として、嵯峨天皇弘仁年間、殊に其  
の十四年間の後半に於て、檢非違使は既に常置の職として、その職務を行  
へるものと見ることが出來よう。

然し尙些細を尋ぬるに、檢非違使は衛門府の官人中より之に補するもの  
にして (註九)、而して衛門府は弘仁二年 (811) 十一月、衛士府を改めたる  
ものなるを以て (註一〇)、檢非違使の設置は弘仁二年十一月以後と推定す  
ることは、大體に於て正當であらうと思はれる。而して前述の文德實錄所收  
の興世書主の傳によれば、弘仁七年二月、左衛門大尉に轉任して檢非違使  
事を兼ね行ふとあるを以て、當時既に檢非違使の名稱の存在せしことは明  
かにして、この兩者の史料に基き、檢非違使の創設は弘仁二年十一月より  
弘仁七年二月までの、四年三ヶ月の間に於てゐると推測することが出來  
よう。

## (II) 檢非違使廳の創設と史料



檢非違使廳の創設せられたる年代は、檢非違使創設年代の不詳なると同様に、之を明確にすることを得ざるも、諸史料の記す所より推測して、大略仁明天皇の承和元年（天長十一年）（834）と見るのが妥當であらう。但し諸説紛々たること、次の如くである。

- 一 淳和天皇御宇、天長元年、始メテ使廳ヲ置カセラレテ以降云々。（吾妻鏡）（註一一）
- 一 檢非違使、天長七年此ノ局ヲ置ク。（拾芥抄）（註一二）
- 一 檢非違使、此レヲ使廳ト云フ。本所ハ乃チ靱負廳ナリ。淳和天皇御宇、天長年中初メテ之ヲ置ク。（中略）天長年中、唐朝ニ准ジテ使廳ヲ置ク。（職原鈔）（註一三）

以上の諸史料は、檢非違使廳の創設年代を漠然と記述せるに過ぎず、これのみを以てしては、遽かに何れとも斷定し難い。

- 一 天長元年、是歲始メテ延尉佐ヲ補ス。（帝王編年記）（註一四）
- 一 承和元年、是歲始メテ檢非違使別當ヲ置キ、文室秋津ヲ之ニ補ス。（帝王編年記）（註一五）
- 一 天長十一年承和元年甲寅。參議從四位上文室秋津。正月七日檢非違使別當ニ補ス。使別當ノ始メナリ。（公卿補任）（註一六）

以上、列擧せる三個の史料は、檢非違使廳創設の年代を、使廳の組織完成せし年代より考察せんが爲めに擧げたるものである。而して檢非違使廳の組織の完成とは、檢非違使廳に長官別當以下の廳員が所謂四等官の形式に准じて整備せらるゝ時を云ふ。然るに檢非違使廳の廳員は、先づ次官級たる佐及び判官級たる尉（佐尉を併稱して延尉と云ふ）が置かれ、最後に長官級たる別當の設置を見るに至れることは、帝王編年記の記す如くである（註一七）。而して別當の設置は、仁明天皇承和元年（834）を以て其の最初と爲すこと、公卿補任の示すが如くなるを以て、檢非違使廳は承和元年（834）を以て長官別當の設置により、之を長官とする一官府の實體を具へ

得たるものと見るべきであらう。但し當時、之を以て直ちに檢非違使廳なる名稱を有する一官府の設置を見たりと解し得るや否やは別問題である。

### (III) 史料の缺逸

檢非違使竝に檢非違使廳の創設年代の明確ならざる理由は、先づ第一に記録の欠缺である。國の正史たる續日本紀、日本後紀を見るに、些少の缺文あるは止むを得ざるとするも、嵯峨天皇弘仁六年末（815）までは比較的史實の明細なるに對して、之に何等檢非違使竝に檢非違使廳の記事を見ぬ。之に反して弘仁七年（816）正月より天長十年（833）二月までの日本後紀は全部缺文である。既述の如く、弘仁七年二月には與世書主が左衛門大尉に任じ、檢非違使事を兼ね行へることが明かなるを以て、この頃より檢非違使のこと漸く記録に現れんとするに當り、その史實を記載すべき日本後紀の缺文多きことは、何としても遺憾千萬と云はざるを得ぬ。若し日本後紀にして、弘仁七年正月より天長十年二月までの記事に缺文無かりしものとすれば、恐らく其の中に檢非違使に関する記事が多く見られたであらうと思はれる。蓋し天長十年二月までに止まる日本後紀の記述に續いて、更に天長十年二月以降の史實を記載せる國の正史たる續日本後紀には、天長十年（833）十二月癸未朔條に於て、山城國愛宕郡賀茂社以東一里餘の所に在る元の名を岡本堂と號する道場を、天長中、檢非違使が廢毀せし事件を既に記載せるが故である（註一八）。國の正史にして、檢非違使の關與せる事件を最初に記載せるは、續日本後紀所收の此の天長十年十二月癸未朔條の記事なるが、之に次ぐものは、同じく續日本後紀、承和四年（837）十月辛卯朔條に、檢非違使をして東西兩京の飢病、百姓の勘錄に派遣せしめられたる記述にして（註一九）、以下、天長十年（833）より天安二年（858）に至る廿五年間の正史たる續日本後紀、文德實錄には、檢非違使に関する記事が隨處に收録せられてゐる（註二〇）。之を以てしても、弘仁七年（816）正月より天長十年（833）二月に至る十七年間の日本後紀の缺文こそは、實に

惜しむべきものである。

#### (IV) 谷森氏説と卑見

故谷森氏は其の著書「檢非違使ヲ中心トシタル平安時代ノ警察狀態」中に於て、檢非違使創設時日の不明なる理由として、一には檢非違使の創設が官符若しくは詔勅なくして行はれたり、即ち檢非違使が其の成立上所謂官使にも詔使にも非ざりしが爲めなりとせられ(註二一)、二には檢非違使派遣の事情として檢非違使は弘仁初め市井に何事か起りて糾彈すべき犯罪のありし時、偶然に衛門府の一官人<sup>げんびゐし</sup>が檢非違使と稱して臨場せるを其の最初とはせずと述べられ、之に基き檢非違使初設の時日の曖昧なる所以を説かれてゐる(註二二)。その推論の卓越せることに於ては、多大の敬意を表するものであるが、吾人は些か之に異なれ見解を有するが故に、以下、之に關する卑見を述べて見度い。

第一の論點は、檢非違使が所謂官使にも詔使にも非ずと云ふに在る。政事要略によれば、「檢非違使所謂詔使也云々」と見え(註二三)、檢非違使を以て詔使とする。政事要略は惟宗允亮の撰にして、その記述は史料として十分なる價值を有することは周知の事實なれば、この意味に於ては、政事要略が檢非違使は詔使なりと云へる記述は十分信するに足るべきであらう。而して詔使とは、名例律によれば、「詔使者奉勅定名。及令所司差遣者是也。」と見え(註二四)、詔使は勅を奉じて使の名稱が定められ、所司の官人をして差遣せしめらるゝものとせられる。従つて、之によれば檢非違使なるものは、勅命により其の使の名稱が檢非違使と定められ、衛門府の官人をして差遣せしめられたるものと解し得る。又、續史籍集覽によれば、「詔使トハ宣下ノ使也」と見えてゐるが(註二五)、檢非違使が宣下の使なることは、既述の如く、檢非違使は所謂檢非違使宣旨を蒙ることにより、之に補せらるゝの事實を以ても立證し得る所である。如上の理由により、吾人は檢非違使が官使にも詔使にも非ずとの故谷森氏の所説に左袒し難

く、檢非違使は詔使なりと解さざるを得ない。従つて、檢非違使が詔使若しくは官使ならざるの故を以て、その創設年代の不詳なる理由とは爲し得ぬであらう。

第二の論點は、檢非違使なる名稱は、偶然にも市井の糺彈すべき一事件に對して、衛門府の官人が檢非違使と稱して臨場せると云へるに在る。而して故谷森氏の説く所の「偶然ニ、衛門府ノ一官人が<sup>ケンビキシ</sup>檢非違使ト稱シテ臨場セル」とあるは、恐らく、衛門府官人が檢非違使の名を自稱せるものゝ如くに解される。蓋し、若し然らずとすれば、衛門府官人が檢非違使と稱せることは、官使若しくは詔使として、勅により其の名稱を定められたるものと解する外なく、かくては、前掲、故谷森氏の第一の理由に反するを以てある。然らば檢非違使なる名稱は、衛門府官人が「市井ニ何事カ往イテ糺彈スベキ犯罪アリシ時、偶然ニ檢非違使ト稱シテ臨場セル」ものであらうか。惟ふに「使」なる名稱は、第一章に於て説ける如く、臨時官の名稱にして、その「使」名は一官人の能く自ら恣に稱し得べき所ではない。必ず勅命を蒙るべきものにして、詔使、官使の意義亦此處に存する（註二六）。従つて、衛門府一官人が偶發の事件に對して、自ら檢非違使と名乗りて臨檢するが如きことは、當時の如き官僚政治の盛なりし時代に於ては、到底考へられざることゝ云はねばならぬ。

以上、述ぶる所により、吾人は、檢非違使を以て詔使となし、その初設の時日の不明は寧ろ記録の缺逸に歸せしめんとするものである。類聚三代格、卷十二、諸使並公文事には多くの詔使、官使に關する記事を見るも、それすら、大部分は弘仁九年以降のことにして、吾人の最も望める弘仁二年十一月より弘仁七年二月までの事項は、たとへ檢非違使に非ざる事項と雖も之を知ること能はざるは（註二七）、畢竟、この間に於ける「使」に關する記録の缺逸と見るの外はないであらう。

類聚國史によれば、弘仁七年（816）八月、官稻を燒却せる地方に<sup>〇・●・●</sup>檢燒損

使の派遣せられたることが見え(註二八)、類聚三代格には、天長四年(827)、坊城の修理に檢破損使の派遣せられたることが見えてゐる(註二九)。是等の臨時派遣の所謂「使」と同様に、最初、檢非違使は市中に非違の事件發生せる時、之を檢斷せんが爲めに、當時京中の警察を掌れる衛門府官人をして、勅命を以て、檢非違使と稱する「使」として現場に派遣せられたるに始まると推測される。換言すれば、檢非違使は即ち臨時派遣の使にして、非違の檢察を爲すものなれば、恐らく斯くの如き事情より檢非違使の名稱を定められたるものであらう。従つて檢非違「使」は、その本質上より云へば、一事件に關する非違の檢察終了せば、檢非違使の補任は此の「使」命を帶べる衛門府官人より解除せらるべきである。蓋し「使」は臨時のものなるを以てである。然るに當時は、強盜、竊盜、群盜、殺害、刃傷等頻發し、京中の治安紊亂せる時なれば、一事件毎に檢非違使として臨檢せるものが、いつとはなく常置せらるゝに至り、此處に至つて、本來の「使」を離脱して、檢非違使なる常置の職となれるに至つたものであらう。

檢非違使廳の創設は、既述の如く、かの勘解由使廳が勘解由使の設置と共に構成せられたるとは異なり、檢非違使の創設とは別個の創設經路を有する。而も檢非違使廳の創設は、その創設と同時に其の構成員が確定せられたるものに非ずして、むしろ檢非違使間に發生せる階級別によつて、自づと檢非違使廳の構成を見るに至れるものと考へられる。即ち既述の政事要略、帝王編年記、公卿補任等によれば、先づ看督長、次いで尉、佐、最後に別當が設置せられてゐる。檢非違使に別當を置けることは、即ち檢非違使廳の一官府としての完成にして(註三〇)、之によつて檢非違使に於ても所謂四等官に類する別當、佐、尉、志の諸員が配置せられたるものと見るべきであらう。従つて別當設置の年たる承和元年(834)を以て檢非違使廳構成の時となし、この意味に於て、檢非違使廳の設置は承和元年(834)なりと解し度い。

如上の意味に於ける檢非違使廳創設年代を承和元年となす説は、故谷森氏亦採るゝ所にして、同氏は之を「檢非違使廳ハ承和元年ヲ以テ成備ス」と述べられてゐる（註三一）。然し乍ら、此處に考究を要すべきは、吾人が謂ふ所の「檢非違使廳」なる名稱が、この承和元年を以て公稱せられたりや否や。従つて、承和元年に「檢非違使廳」なる名稱を有する官府が、名實共に存在せりや否やである。

四等官に類する人員の配置せらるゝにより、之を以て檢非違使廳の實體を備へたりとの見解は、他の諸官司の官制より見れば、首肯せらるべきことではある。然し乍ら、檢非違使を以て構成さるべき官府とも云ふべきものに、檢非違使廳なる名稱が附與せられたる年代は如何。依つて、吾人は檢非違使間に、別當以下、四等官に類する階級が生じ、且つ之により構成せらるゝ一の集團に對して、公に檢非違使廳なる名稱を附與せられたる時を以て、名實共に兼備せる檢非違使廳の設置年代と解し度いのである。

私は檢非違使廳の名實共に兼備せる時を、宇多天皇寛平六年（894）十月五日と見る。その論據は寛平七年二月一日別當宣に「（前略）之ニ因リ去年十月五日、須ク左右檢非違使廳ヲ定メ、毎日政ヲ行フノ狀、已ニ畢ンヌ云々」とあるに基く（註三二）。即ち檢非違使廳なる名稱の史實に現はれたるは、この寛平六年十月五日を以て嚆矢とする。寛平六年十月五日以前には檢非違使の名稱こそ隨處に頻出すれ、檢非違使「廳」の名稱は嘗て見られざるが故である。

清和天皇貞觀六年（864）八月十五日宣旨によれば、「檢非違使事ハ本府ノ局ヲ停メ、市司ニ罷リテ行フモノナリ」と見えてゐる（註三三）。これ、檢非違使の職務は從來衛府に於て取扱ひ來れるを、今後、市司に於て取扱ふべき旨を規定せるものにして、之に依るも、當時、未だ檢非違使廳なる官府の存在せざりしことを知ることが出来る。蓋し、若し當時既に檢非違使廳なる官府の設置あれば、何を以て、如上の宣旨の頒下を必要とするであら

うか。檢非違使事は檢非違使廳に於て之を行ふべきであり、衛府、市司に於て之を行ふ必要無きものと云はねばならぬ。後述する如く、檢非違使廳の廳舎は、通常衛府の政舎を以て之に宛てたるを以て、或は上述する貞觀六年八月十五日宣旨は、檢非違使廳の廳舎は衛府の政舎そのまゝに置き、檢非違使の職務のみを市司に於て取扱へるが如くにも解さるゝも、これ所謂牽強附會の辯にして、貞觀年間に於て、既に檢非違使廳が官府として名實兼ね備はれりと見るの根據無き以上、叙上の論旨は恐らく其の當を得ざるものと云ふ外はない。

次に前出せる寛平六年十月五日別當宣は、左右の檢非違使廳を定めたるものにして、それ以前に、既に左右に分れざる單獨なる檢非違使廳存在し、寛平六年十月五日、これが左右に分れたるに過ぎずとの見解も一應は首肯せらるゝが如くである。然し乍ら、これ亦、次の理由により解消せらるゝであらう。即ち寛平六年十月五日以前に、既に一官府として檢非違使廳なる名稱を有したりとせば、その立證如何。假りに承和元年を以て、檢非違使廳なる名稱を有する一官府が設置せられたりとすれば、少くとも承和元年(834)より寛平六年(894)に至る六十年の歴史の間には、或は國の正史に、或は公邊の記録等に、檢非違使廳なる名稱の見ゆべき筈なるに、檢非違使の名こそ出づれ、檢非違使「廳」の名の出でざるは如何と問はざるを得ない。

次に寛平六年十月五日、檢非違使廳をして左右の二個とせる理由は、恐らく、當時既に左右檢非違使の名あるにより、左檢非違使を以て左檢非違使廳を、右檢非違使を以て右檢非違使廳を、それぞれ構成せしめんが爲めであらう。蓋し、後年に至り、天曆元年(947)六月廿九日、この左右の檢非違使廳の中、右檢非違使廳を廢し、専ら左檢非違使廳を以て之を檢非違使廳と稱するに至るや(註三四)、檢非違使も亦左右の別なく、等しく檢非違使と稱する至れる事實を以てしても(註三五)、之を窺ひ知ることが出來

よう。既述の如く、檢非違使は弘仁年間に設置せられたるも、設置當初より左右檢非違使が設置せられたるものではない。檢非違使は衛府官人の兼補せらるゝものなるも、設置當初に於ては左右の各衛府官人と雖も、檢非違使たるに於ては、敢て之に左右の別なく、等しく檢非違使と稱した(註三六)。然るに檢非違使が分れて左右檢非違使となれるは、國の正史の上にては、仁明天皇嘉祥三年(850)三月十六日を以て初見とする(註三七)。蓋し檢非違使なる職名は一なれども、左衛門府官人にして檢非違使たる者は之を左檢非違使、右衛門府官人にして檢非違使たる者は之を右檢非違使として、各その本府の所屬に従ひ、左右檢非違使の別を生じたるものであらう。爾後、左右檢非違使の名は隨處に見らるゝも(註三八)、天曆元年(947)六月廿九日、檢非違使廳が左右の別を廢して、單に檢非違使廳と稱するに至れると共に、この檢非違使に左右の別も廢された。蓋し爾後、檢非違使に左右の別あるを見ざるを以てゐる。従つて、檢非違使廳に左右の別の廢止は、同時に檢非違使に左右の別の廢止とは云ひ得るも、檢非違使に左右を設けたるにより、檢非違使廳に左右の別を設けたりとの理由は成立しない。蓋し寛平六年(984)十月五日の別當宣による左右檢非違使廳の設置は、檢非違使に左右の別を設けてより、遙かに後年のことなるを以てゐる。寛平六年十月五日の別當宣は、檢非違使廳を左右に分つことを規定せるものではなく、左右の檢非違使廳を設置すべきことを定めたるものである。従つて此の文意より見るも、檢非違使廳なる名稱は、この時を以て始めて左右の檢非違使廳として用ひらるゝに至れるものにして、それ以前に於ては、檢非違使廳なる名稱は公稱せられざりしものと解すべきである。即ち檢非違使廳なる名稱は最初は左或は右檢非違使廳として公稱せられ、後、右檢非違使廳を廢して、左檢非違使廳のみを以て、單に檢非違使廳と稱するに至れるものである(註三九)。而して前者の場合は寛平六年(894)十月五日なるを以て、この時を以て、左右の別を問はず、檢非違使「廳」なる名稱



が檢非違使別當以下、檢非違使により構成せらるゝ一團に正式に命名せられ、之を以て名實共に備れる檢非違使廳の設置せられたるものと解したい。従つて、寛平六年十月五日以前に於ては、たとへ檢非違使間に、別當以下の四等官に類する人員が存するにせよ、その行ふ所は單に檢非違使事にして、獨立せる一官府としての政事ではなかつた。即ち實質上の檢非違使廳は既に承和元年(834)に存在せるも、これが檢非違使廳を公稱し得る形式的存在を有するに至れるは、寛平六年(894)十月五日なりと解するものである。

註一 谷森饒男「檢非違使ヲ中心トシタル平安時代ノ警察狀態」一四頁。

淺井虎夫「併歸使廳考」(史學雜誌、第十四編、第一號、五二頁)

註二 從四位下治部大輔興世朝臣書主卒。書主右京人也。(中略)書主爲人恭謹。容止可觀。(中略)弘仁七年二月轉爲左衛門大尉。兼行檢非違使事。(文德實錄、卷二、嘉祥三年十一月六日巳卯條、二一頁)

註三 弘仁八年九月廿三日。中納言藤原朝臣冬嗣宣。奉勅。私飼鷹者。頃年禁斷已久。而今諸人。無有公驗。乖制恣養。宜仰看督(長)嚴令禁察。(政事要略、卷七十、糺彈雜事十、六一三頁)

註四 看督長が當時、既に檢非違使の配下たりしことを示すことは、次の史料を以て知られる。

又去弘仁十一年十二月十一日宣旨稱。檢非違使所掌之事。與彈正同。臨時宣旨。亦糺彈者。加以者看督長左右各二人。差科非一。無有暫暇云々。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、天長九年七月九日太政官符、應納雜色人贖物事所收、六四五頁)

註五 (前略)望請左京官人。抑留位錄季祿。雜色人等令檢非違使催徵。(中略)又下宣旨檢非違使畢亦宜同移之。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、弘仁十一年十一月廿五日太政官符、應移式部省抑未輸贖銅諸國朝集使返抄移大藏省抑留位祿季祿事、六四一頁)

註六 又去弘仁十一年十二月十一日宣旨稱。檢非違使所掌之事。與彈正同。臨時宣旨。亦糺彈之者。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、天長九年七月九日太

政官符、應納雜色人贖物事所收、六四五頁)

註七 弘仁十二年十一月廿日宣旨。右大臣宣。檢非違使等緣使之政。有令外記傳申者。宜隨狀申者。(類聚符宣抄、第六、外記職掌、一三三頁)

註八 弘仁十三年二月七日太政官符。應定罪人配役年限事。  
右檢非違使解稱云々。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、六三一頁)

註九 檢非違使。(中略)爲衛府之人補之。(職原鈔、下、六四三頁)

註一〇 改左右衛士府。爲左右衛門府。(日本後紀、卷廿一、弘仁二年十一月廿八日己未條、一〇六頁)

註一一 淳和天皇御宇天長元年。被始置使廳以降云々。(吾妻鏡、第五十三、文永三年三月廿九日壬戌條、後篇、八六九頁)

註一二 檢非違使。天長七年置此局。(拾芥抄、中本三、第一官位部、安政五年校訂本、第三冊、六頁)

註一三 檢非違使。此云使廳。本所乃韋負廳。淳和天皇御宇。天長年中初置之。  
(中略)天長年中。准唐朝置使廳。(職原鈔、下、六四三頁)

註一四 天長元年。是歲始補廷尉佐、左笠仲守、右藤永雄。(帝王編年記、卷十三、一九〇頁)

註一五 承和元年。是歲。始置檢非違使別當。文室秋津補之。(帝王編年記、卷十三、一九四頁)

註一六 仁明天皇承和元年。參議從四位上文室秋津。左大辨。左中將。武藏守。  
正月七日。補檢非違使別當。使別當始也。(公卿補任、經濟雜誌社版、國史大系、第九卷、一〇七頁)

註一七 但し帝王編年記は史料としての確實性に乏しく、殊に年代に關しては、六國史に比して往々誤謬も見受けらるゝものなるも、廷尉佐設置に關する史料は、これ以外に見られる得ざるを以て、之に關する限り、暫く本書に據ることとする。

註一八 道場一處在山城國愛宕郡賀茂社以東一許里。本號岡本堂。是神戸百姓奉爲賀茂大神所建立也。天長年中檢非違使盡從毀廢云々。(續日本後紀、卷二、天長十年十二月癸未朔條、一八頁)

註一九 是日。喚左右京亮。左右衛門。檢非違使佐并四人。於殿前宣勅。遣勘錄東西兩京飢病百姓。特加賑恤。以陰霖經日。穀價師貴也。(續日本後紀、卷

六、承和四年十月辛卯朔條、六九頁)

註二〇 之を列擧すれば、大略、次の如くである。

分遣左右衛門府生。看督等於畿内諸國。逐捕奸盜云々。(續日本後紀、卷七、承和五年二月十二日庚子條、七四頁)

勅。彈正臺及檢非違使。雖配置各異。而糾彈違犯。彼此一同。但在犯人逃走。姦盜隱遁。彈正之職。不堪追捕。自今以後。緣糾違犯。有可追捕者。臺使相通。遣檢非違長等。隨事追捕。立爲永例。(續日本後紀、卷八、承和六年六月六日乙卯條、八八頁)

勅令檢非違使等。當色之外者雜色袍。(續日本後紀、卷八、承和六年七月十日乙丑條、八九頁)

遣左大臣。檢非違使。及看督近衛等。巡察京中被水害者。兼復遣左衛門佐從五位下紀朝臣道茂。齋米鹽賑恤之。(續日本後紀、卷十八、嘉祥元年八月六日壬辰條、二一五頁)

此日。御體綿々。事極屬續。諸名僧等。持咒誓願。五輪投地。不暫休息。左右檢非違使。獄中人。除盜之外。悉從放免。(續日本後紀、卷二十、嘉祥三年三月十六日甲午條、二三七頁)

左衛門權佐從五位下藤原朝臣宗善爲檢非違使。(文德實錄、卷四、仁壽二年二月廿一日戊午條、三八頁)

右衛門權佐從五位下安倍朝臣貞行爲檢非違使。(文德實錄、卷四、仁壽二年三月四日庚午條、三九頁)

註二一 谷森饒男「檢非違使ヲ中心トシタル平安時代ノ警察狀態」二〇——二二頁

註二二 同上。二二——三頁。

註二三 政事要略、卷六十九、糾彈雜事九、五九〇頁。

註二四 律疏殘篇、日本古代法典本、二〇頁。

註二五 續史籍集覽、第二集一、式目抄、坤、一三頁。

註二六 天長二年五月十日太政官符。定詔使官使事。(前略)左大臣宣。奉 勅。

度時立制。古今收貴。宜定使色以肅將來。其巡察覆囚檢稅交替畿内校班田間民苦并訴等使。並准詔使之例。賑給檢損田池溝瘠死等使。猶爲官使。但遣使<sup>〇</sup>之<sup>〇</sup>旨。出於<sup>〇</sup>勅<sup>〇</sup>語。卽是等所謂詔使而已。不可更限事之輕重。(類聚三代格、卷十二、諸使并公文事、三六三頁)

註二七 類聚三代格、卷二十、諸使并公文事、三六三 一一三八二頁。

註二八 嵯峨天皇弘仁七年八月廿三日丙辰。公卿奏言。上總國夷瀧郡<sup>〇〇</sup>官物所燒。  
准額五十七萬九百束。正倉六十宇。刑部省斷罪言。檢<sup>〇</sup>燒<sup>〇</sup>損<sup>〇</sup>使<sup>〇</sup>散位正六位上大中  
中臣朝臣井作等申。稅長久米部當人。臨失火時。逃亡自殺。推量意況。豈無所  
犯忽自引手。可謂當人侵盜官物。謀而放火者。省案律。當人所犯。罪當絞刑而其  
身自殺。仍更不論云々。(類聚國史、卷八十四、政理部六、燒亡官物、四九六頁)

註二九 (前略) 謹案太政官去天長四年六月廿三日下左京職符稱。中納言兼左近  
衛大將從三位行民部卿清原真人夏野宣。作坊城依檢<sup>〇</sup>破<sup>〇</sup>損<sup>〇</sup>使<sup>〇</sup>散位從五位下伴宿  
禰嗣枝等勘定。無損之處具付京職。修理功畢之處職更檢領。付畢之後。理損  
之物。即勘錄移送使司。若非理濫損令職修之者。而職不遵行濫損者多。望  
請。重複下知依舊令檢領之。謹請 官裁者。右大臣宣。不愼符旨意在職吏。  
宜加下責莫令更然者云々。(類聚三代格、卷十二、正倉官舍事、齊衡二年九月  
十九日太政官符、應修理坊城非理之損事所收、三九〇頁)

註三〇 檢非違使別當は、檢非違使の統率者として置かれたるものにして、檢非  
違使廳の長官として置かれたるものではない。檢非違使別當の設置と檢非違  
使廳の設置とは、何等その間に有機的關係あるものには非ざるも、而も「諸  
司以別當爲長官」と三代實錄に見ゆるが如く、檢非違使別當を置けることは、  
畢竟、檢非違使によつて官府が事實上構成せられ、檢非違使別當が其の長官  
たることを示すものである。

註三一 谷森饒男「檢非違使ヲ中心トシタル平安時代ノ警察狀態」一六頁。

註三二 別當中納言兼左衛門督從三位源朝臣光宣稱。近者因徒滿獄。科決猶遲。  
或所犯是輕。禁囚日久。或本罪既重。待斷終身。獄官之道。理不可然。因之  
去年十月五日。須定左右檢非違使廳。每日行政之狀已畢。而猶遲緩。不肯行  
之。自今以後。宜依前件行其政。不可隔日。又須所行事條目錄。每日申之者。  
寬平七年二月廿一日 民部權大輔兼右近衛少將在原弘景  
(政事要略、第六十一、糺彈雜事一、五二六頁)

註三三 貞觀六年八月十五日。右大辨大枝朝臣晉人傳宣。右大臣宣。檢非違使事。  
停本府之局。罷市司行者。(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五二六頁)

註三四 (前略) 是則不定使局於一處。往反左右衛門府之所致也。況去寬平七年  
二月二十一日別當中納言兼左衛門督源朝臣光宣。定左右檢非違使廳。不可隔

日行政之由。已以明也。而年紀多積。自似懈體。於政貴簡要。(中略)加以諸司行務。皆定其廳。至于使政。何在兩府。靜尋由緒。專非隱便。須於左右府停所行之政。以左政舍便使廳。每日勤行令無擁滯云々。

天曆元年六月廿九日

(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五二七頁)

**註三五** 定檢非違使。并諸司所々諸司別當。(日本紀略、天曆元年十月廿七日戊申條、後篇、五四頁)

(前略) 仍檢非違使。令實檢云々。(日本紀略、天曆三年四月十日癸未條、後篇、六三頁)

(前略) 感神院與清水寺鬪亂。遣檢非違使制止之。(日本紀略、天德三年三月十三日條、後篇、七五頁)

**註三六** (前略) 天長年中檢非違使云々。(續日本後紀、卷二、天長十年十二月癸未朔條、一八頁)

是日。喚左右京亮。左右衛門。檢非違使。佐并四人云々。(續日本後紀、卷六、承和年十月辛卯朔條、六九頁)

勅。彈正臺及檢非違使。雖配置各異。而糺彈違犯。彼此一同云々。(續日本後紀、卷八、承和六年六月六日乙卯朔、八八頁)

勅。令檢非違使等。當色之外着雜色袍。(續日本後紀、卷八、承和六年七月十日乙丑條、八九頁)

遣左大臣。檢非違使。及看督近衛等云々。(續日本後紀、卷十八、嘉祥元年八月六日壬辰條、二一五頁)

**註三七** 此日。御體綿々。事極屬續。諸名僧等。持咒誓願。五輪投地。不暫休息。左右檢非違使。獄中人。除盜之外。悉從放免。(續日本後紀、卷二十、嘉祥三年三月十六日甲午條、二三七頁)

**註三八** (前略) 召左右檢非違使。除常赦所不免之外。大辟已下罪人。咸從赦免云々。(文德實錄、卷十、天安二年八月廿四日壬子條、一二〇頁)

(前略) 左右檢非違使於左衛門府南門。出詔以前獄繫囚左百六人。右九十四人。惣二百人。一時放却。賜錢各卅文。(三代實錄、卷卅八、元慶四年十二月七日丙戌條、四八六頁)

詔左右檢非違使。免輕重罪繫囚廿二人。(三代實錄、卷四十九、仁和二年十

月六日辛亥條、六一九頁)

註三九 奏被定檢非違使職申請五箇條雜事。(日本紀略、後篇、長保三年閏十二月  
七日甲戌條、一九九頁)

## 第二 諸國檢非違使及び神郡檢非違使の設置

### (I) 諸國檢非違使の設置

諸國檢非違使の創設せられたる年代及び其の設置理由は、これ亦史料の  
缺逸により明かならしめ難いが、國の正史に最も早く現れたるものは、文  
徳天皇齊衡二年(855)三月、伊勢諸繼が把笏帶劍の諸國檢非違使の嚆矢を  
爲したることである。即ち次の史料に因る。

一 大和國檢非違使正六位上伊勢朝臣諸繼把笏ニ預カル。諸國檢非違使  
笏ヲ把ルハ、此ノ人ニ始マル。(文徳實錄)(註一)

之によれば、伊勢諸繼は大和國檢非違使にして、諸國檢非違使にして、  
而も特に把笏に預かるの嚆矢をなすと云ふのである。即ち諸國檢非違使は  
必ずしも帶劍把笏の有資格者には非ざるも(註二)、諸國檢非違使にして始  
めて把笏の有資格者となれるは、即ち當時、大和國檢非違使たりし伊勢諸  
繼その人なりと云ふのである。従つて此の史料によれば、齊衡二年以前に  
於ては、既に把笏に預らざる諸國檢非違使の存在せしことが推測される。

諸國檢非違使設置の理由は、恐らく京都に於ける檢非違使設置の影響に  
よるものと推察される。殊に京都に於ける檢非違使が、更に畿内諸國へも  
非違檢察、盜賊逮捕の目的を以て派遣せらるゝに及び(註三)、司法警察上、  
檢非違使設置の効果の甚大なることが認識せられ、諸國に於ても、國司の  
下に檢非違使を置き、後には國司公廨を割きて俸料となし(註四)、國司の  
職掌の一たる所轄區域の糾察權、即ち所管區域内の司法警察權行使を之に  
委任せしむるに至れることが、諸國檢非違使設置の主なる理由であらう。  
蓋し地方政治紊亂の當時に於ては、當該時代の名物と云はるゝ群盜の蜂起

騷擾に對して、これが取締りの爲めの警察權行使を、膨大なる行政事務を管掌する國司の職掌の一とするよりは、むしろ専任司法警察機關を設置して、之に一切の司法警察權を委任せしむることが適宜の策と云ふべきであつたからであらう。例へば天慶九年(946)三月十三日の太政官符によれば、隱岐國司より太政官に對し、國內に檢非違使の設置を申請したる理由は、密貿易の取締、故意に因る租税未納の制止等の非違の檢正、糺斷を目的とするものであり(註五)、天曆三年(949)正月廿一日、近江國より太政官に上れる解狀によれば、檢非違使の増員申請の理由は、近江國は畿内五ヶ國に境を接し、東山、東海、北陸三道の要衝に當り、而も奸猾の往來絶えず、盜賊の類の國內に遍滿せるにより、これが追捕檢察は既定の員數を以てしては、萬全を期し難きが故であるとしてゐる(註六)。以て諸國檢非違使設置の理由の一端を窺ふことが出來よう。

諸國檢非違使の設置せられたる國々は、行政區劃の上より考察するも、京都を中心とする近隣諸國より漸次遠國に互りて設置せられ、司法警察權行使の上より考察するも、治安紊亂の甚だしき國々に隨時設置せられたるものと推察される。之を例へば、文德實錄、三代實錄、別聚符宣抄等によるに、齊衡二年(855)以後、約三十年間には、既に大和、攝津、山城、丹波、河内、近江、播磨、讃岐等の近京諸國を始めとして、武藏、上總、下總、備中、能登、佐渡等の諸國に相次いで設置せられてゐる(註七)。又天慶九年(946)三月及び同十二月には隱岐、和泉、丹波、紀伊の諸國にも檢非違使が設置せられてゐる(註八)。而して治安紊亂の甚だしき地方としては、就中、武藏國が最も著名にして、貞觀三年(861)十一月には、國內の各郡毎に檢非違使一人を置き、兇黨、群盜の鎮壓に備へしめたる由、三代實錄に見えてゐる(註九)。

國司に直屬する諸國檢非違使(國郡檢非違使)の外、九州大宰府に直屬する府檢非違使(大宰檢非違使)があり、王朝時代中期より武家時代初期

に於ては、檢非違使の名が諸國に見えてゐる。その設置年代及び其の設置理由に就ては、目下の所、之を明かになし得る術もないが、恐らく府檢非違使は諸國檢非違使が國司の下に設置せられたると同様の理由なるべく、又、檢非違使の設置は、名稱こそ異なれ、實質的には諸國檢非違使の延長なるべく、且つ檢非違<sup>〇</sup>所使、檢非違使<sup>〇</sup>所等と稱せらるゝ點より考察すれば、此の時代の「所」なる意義が「官署」の意なることより(註一〇)、國郡司の實權なき王朝末期には、諸國檢非違使が既に國司の直屬より離脱して、獨立の司法警察機關として存在せしものではあるまいかと考へられる。

## (Ⅱ)神郡檢非違使の設置

諸國檢非違使は國司に直屬して、國郡内の司法警察を管掌せるものなるが、特に伊勢、常陸の如く、伊勢大神宮、香取鹿島兩神宮の在します國々には、諸國檢非違使の外に、更に是等の神宮に直屬する檢非違使を置き、神宮の所轄領域内の刑事裁判權、警察權を管掌せしめた。これ即ち神郡檢非違使であるが、その創設の年代及び理由に就ては、伊勢國の伊勢大神宮檢非違使が最も明瞭に之を示してゐる。即ち次の如くである。

一 宇多天皇寛平九年十二月廿二日。始メテ大神宮司檢非違使ヲ置カセラル。(類聚大補任)(註一一)

一 寛平九年十二月廿二日太政官符

應ニ伊勢大神宮神郡檢非違使ヲ置クベキ事

右神祇官奏狀ニ依リ稱ク。大神宮司解ニ稱ク。檢非違使國內ニ在リト雖モ、ト食者ニ非ザレバ神郡ニ入ルコトナシ。茲ニ因リ<sup>ビツ</sup>管スラ度會多氣飯野三箇神郡諸人、或ハ禁忌ヲ犯シ、或ハ濫惡ヲ好ミ、訴訟ノ輩ハ日月モ能ハズ。司神事ヲ勤メ、巡察ニ遑無シ。望請スラク、神民ノ中、事ニ<sup>ツマ</sup>幹カラシ者ヲ、檢非違使ニ充テ、一向ニ犯罪ノ人ヲ糺サシム。但シ俸料ヲ給セズ。大内人ニ准ジ把笏シテ事ニ從フモノナリ。官ハ解狀ニ録シ、謹ミテ 天裁ヲ請フモノナリ。權大納言正三



位兼行右近衛大將民部卿中宮大夫菅原朝臣宣。奉勅。依請。(註一三)  
 之に依つて按するに、伊勢大神宮に神郡檢非違使の始めて設置せられたるは、宇多天皇の寛平九年(897)十二月である。神郡とは國郡司の有する行政權を太政官より神宮に附與せられ、郡内の行政(刑事裁判を含む)は凡て神宮司の管掌する所となり、國郡司の行政權より全く分離し、その干渉を許さざる特定地域を云ふ。伊勢國の神郡は弘仁八年十二月廿五日及び寛平九年九月十一日の太政官符により、多氣、度會、飯野の三郡なることが定められてゐる(註一四)。當時、伊勢國には既に國の檢非違使の設置あるにも拘らず、更に度會、多氣、飯野の三神郡内に神郡檢非違使の設置を必要とするに至れる理由は、元來神宮の管轄する神郡は國衙使不可入の特權を有し(註一五)、神郡内に入ることを許可せられたる者はト食者に限定せられ、若し犯罪を犯せる者が神郡内に逃入せる場合には、如何に國の檢非違使と雖も、之に立入りて警察權の行使をなすことは許されなかつた。かくては神郡内は犯罪者の逃避區域、安全地帯と化し、國郡の治安維持、非違の檢察に任ずる國の檢非違使設置の目的は全く無意義となるのみならず、更に神郡内に於ける安寧秩序をも紊すこととなるを以て、特に神郡内にも其の治安維持を掌る神郡檢非違使の設置を必要とするに至れるものである。蓋し、本來神郡を統轄すべき大神宮司は、専ら神事の勤行に従ひ、郡内の巡察に遑無かりしが故である。

註一 大和國檢非違使正六位上伊勢朝臣諸繼預把笏。諸國檢非違使把笏。始於此人。(文德實錄、卷七、齊衡二年三月廿六日乙巳條、七二頁)

註二 諸國檢非違使か必ずしも帶劍把笏の有資格者に非ざることは、三代實錄、卷十六、貞觀十一年三月廿二日庚辰條に、「令下總國檢非違使。帶劍把笏。」(二四六頁)とあるにても知られる。即ち之によれば、下總國檢非違使は最初から帶劍把笏の有資格者ではなく、貞觀十一年三月廿三日に至つて、其の資格を授與せられたと云ふのである。

註三 朝野群載、卷十一、延喜廿年三月廿二日宣旨。同、萬壽二年五月三日太政官符。その他、諸國へ檢非違使派遣の宣旨多し。(二一三——二一九頁)

註四 丹後國言。割國司公廨。准一分例。給檢非違使俸料。太政官處分。依請焉。(三代實錄、卷三、元慶二年二月十三日己卯條、四二一頁)

太政官符大和國司外

從八位上伴宿禰公扶

右從三位守大納言源朝臣高明宣。奉 勅。件人宜補彼國檢非違使者。國宜承知。依宣行之。其公廨准一分給之。符到奉行。

右大辨

左大史

天曆八年二月廿三日

(類聚符宣抄、第七、諸國檢非違使、一七四頁)

註五 太政官符隱岐國司

應補檢非違使大初位下伊我部安國事

(前略) 此遠國離陸地。獨居海嶋。邊要之境。尤可肅清者也。而□□之輩。或稱修高家贄。或號爲私交易。□□來往不絕。求在海物。侵漁少民。因斯所部□□調物難修。□□雖加制止。習而不悛。如是之漸。無紕斷之所致也。況乎官舍官物分在別嶋。非常之危不能不愼。謹檢案內。檢正非違。事在要勢。而此國檢非違使職。未被始置。若不經申請。恐無期補任。今件安國情操廉直。文武相兼。國用擬任。寔堪其職。望請因准諸國例。被任件職。將令糾部內違濫者云々。(後略)

天慶九年三月十三日

(別聚符宣抄、二三頁)

註六 近江國司解 申請 官裁事

請被因准諸國例補任檢非違使四員狀

有此國。(中略) 境接五畿。驛承三道。奸猾之輩。往還不絕。盜賊之類。遍滿境內。爰頃年所被補任檢非違使三人。其員尤少。因之追捕檢察。少人勤行。加以上下國司遙授數多。任用之吏從事者少。爰雜務繁多。無人差使。望請官裁。因准大和播磨讃岐等國例。被置四員檢非違使。令勤職掌。仍錄事狀。謹請官裁。謹解。

天曆三年正月卅一日

(連署人名省略)

(別案符宣抄、二二頁)

註七 齊衡二年三月廿六日乙巳。制。大和國檢非違使正六位上伊勢朝臣諸繼預把笏。諸國檢非違使把笏。始於此人。(文德實錄、卷七、七二頁)

天安元年八月辛未。(中略)詔。令攝津國<sup>〇</sup>人散位從八位下岸田朝臣全繼。帶兵仗。把笏。檢國中非違。(文德實錄、卷九、一〇一頁)

貞觀九年十二月四日己巳。勅。上總國<sup>〇</sup>置檢非違使一員。主典一員。帶劍把笏。(三代實錄、卷十四、二二五頁)

貞觀十一年三月廿二日庚辰。(中略)令下總國<sup>〇</sup>檢非違使帶劍把笏。(三代實錄、卷十六、二四五頁)

貞觀十八年七月八日癸未。山城丹波兩國<sup>〇</sup>司申請。割國司公廨。准一分。給檢非違使。(三代實錄、卷廿九、三七八頁)

貞觀十八年九月十七日辛卯。詔。備中國<sup>〇</sup>置檢非違使一員。把笏帶劍。(日本紀略、前篇十八、四七四頁)

元慶元年十二月廿一日丁亥。(中略)能登佐渡兩國<sup>〇</sup>並始置檢非違使各一人。帶劍把笏。(三代實錄、卷卅二、四一五頁)

元慶二年二月十三日己卯。(中略)丹後國<sup>〇</sup>言。割國司公廨。准一分例。給檢非違使俸料。太政官處分。依請焉。(三代實錄、卷卅三、四二一頁)

元慶三年十月廿二日戊寅。(中略)河內國<sup>〇</sup>檢非違使從七位下八戶史野守。(中略)賜姓高安宿禰。(三代實錄、卷卅六、四六〇頁)

近江國司解 申請 官裁事

請被因准諸國例補任檢非違使四員狀

右此國。(中略)境接五畿。驛承三道。豺獠之輩。往還不絕。盜賊之類。遍滿境內。爰頃年所被補任檢非違使三人。其員尤少。因之追捕檢察。少人勤行。加以上下國司遙授數多。任用之吏從事者少。爰雜務繁多。無人差使。望請官裁。因准大和播磨讃岐等國例。被置四員檢非違使。令勤職掌。仍錄事狀。謹請官裁。謹解。

天曆三年正月廿一日

(連署人名省略)

右中辨藤原朝臣有相傳宣。中納言源朝臣高明宣。奉 勅。近江國<sup>〇</sup>申請檢非違使。宜加置權員一人者。

天曆三年三月七日

左大史海宿禰業恒奉

(別聚符宣抄、二二頁)

註八 天慶九年三月十三日太政官符隱岐國司。應補檢非違使大初位下伊我部安國事。(別聚符宣抄、二三)頁。尙、註五、參照。

天慶九年十二月十日。中使頭朝臣來給。和泉丹波紀伊國申給。檢非違使令  
□化部内濫惡倫事。(貞信公記、續々群書類從、第五、二一五頁)

註九 武藏國每郡置檢非違使一人。以凶猾成黨。群盜滿山也。(三代實錄、卷五、貞觀三年十一月十六日丙戌條、八二頁)

但し檢非違使一人を置くとは、兇猾群盜の鎮壓逮捕のため、專任司法警察官として檢非違使一人を置くの意にして、本來、國郡司の職權内に屬すべきものを、檢非違使に委任せることである。檢非違使が其の職權行使に當つては多くの部下を使用せることは云ふ迄もなく、檢非違使一人のみが實力を以て兇盜の逮捕をなすを云ふものではない。

註一〇 この「所」の義は、侍所、公文所(後の政所)、問注所等の「所」と同義にして「官署」の意であらう。

註一一 宇多天皇。寛平九年十二月廿二日被始置大神宮司檢非違使。豐受大神官權禰宜春彦。(類聚大補任、群書類從、第三輯、三七九頁)

註一二 寛平九年十二月廿二日太政官符

應置伊勢大神宮神郡檢非違使事。右依神祇官奏狀稱。大神宮司解稱。檢非違使雖在國內。非ト食者無入神郡。因茲管度會多氣飯野三箇神郡諸人。或犯禁忌。或好濫惡。訴訟之輩。日月不能。司勤神事。無違巡察。望請。神民之中幹事者。充檢非違使。一向令糾犯罪之人。但不給俸料。准大内人把笏從事者。官錄解狀。謹請 天裁者。權大納言正三位兼行右近衛大將民部卿中宮大夫菅原朝臣宣。奉 勅。依請。

(類聚三代格、卷一、神郡雜務事、四〇頁)

註一三 弘仁八年十二月廿五日太政官符、應多氣度會兩郡雜務預大神宮司事。寛平九年九月十一日太政官符、應以伊勢國飯野郡寄<sup>タケマノル</sup>大神宮事。(類聚三代格、卷一、神郡雜務事、三六——四〇頁)

註一四 註一二、參照。

國衙使不可入の特權とは、特定區域内に、國司の入部して、徴租、檢斷、を行ふことを許さざる特權を云ふ。即ち廣く國司の有する行政權の介在を許さざる特權を云ふ。

## 第四章 檢非違使の沿革

### 第一 檢非違使の沿革

#### （其一 檢非違使廳を中心として）

檢非違使廳を中心として觀たる檢非違使の沿革は、之を檢非違使廳創設時代、檢非違使廳複合制時代、檢非違使廳單獨制時代の三期に分つことが出来る（註一）。

#### （Ⅰ）檢非違使廳創設時代

弘仁年間の前半（810—816）に於て創設せられたる檢非違使は、承和元年（834）正月、參議文室秋津が初代の檢非違使別當に補せられ（註二）、檢非違使全員を統率するの形體を備ふるに至つて、實質的には此の時、既に檢非違使廳の存在を見た。此の時代に於ては、檢非違使の職務は獨立せる政舎にて管掌せられず、檢非違使の本官たる衛門府官人の官衙たる衛門府に於て便宜上取扱はれた（註三）。然るに清和天皇貞觀六年（864）に至り、衛門府に於ける檢非違使に關する職務の管掌は一時停止せられ、専ら京職に屬する市司に於て、之を取扱ふことゝなつた（註四）。

#### （Ⅱ）檢非違使廳複合制時代

かくの如く、檢非違使は實質上は一の官府たる檢非違使廳の體裁を備へながらも、形式上の存在を見ざりしを以て、通常檢非違使の職務は衛門府、市司等に於て取扱はれてゐた。然るに初代檢非違使別當の置かれてより六十年を経て、宇多天皇寛平六年（894）十月五日に至り、左右の檢非違使廳が新たに設置せらるゝに及んで、檢非違使廳の名實共に備はり、廳政の執行、廳務の管掌は専ら之に於て取扱はるゝに至つた。蓋し斯く檢非違使廳を左右に分つ所以は、當時、未決の囚徒獄に滿ち、之に對する審理が遲滯し、爲めに囚徒の中には審理の日の來るを待つ間に、獄中に於て身命を

失ふ者すら生ずるに至れるの故を以て、審理を促進せんがため、檢非違使別當の命令たる所謂別當宣を以て、左右の檢非違使廳を設置するに至つたものである（註五）。

然るに檢非違使及び其の他の廳員の職務に對する懈怠は、日々廳政を執行するに至らず、又、廳務の繁雜と執務の遲緩とより、裁判事務も進捗せず、爲めに更に翌寛平七年（895）二月二十一日、再度別當宣を以て、廳政廳務の勵行方を嚴命するに至つた（註六）。而して此の別當宣によれば、寛平六年十月五日の別當宣の趣旨を勵行せしむるために、（一）毎日廳政を執行すべきこと、（二）執行管掌せる廳政廳務は目錄に記し、毎日之を別當に上申すべきこと。以上の二件を嚴守すべきことを命ぜられてゐる。

併し執政執務の遲滯理由は之のみに止まらず、廳政廳務を執行管掌すべき廳員の定足數の不揃と、其の人員の不足にも因るものにして、この點に關しては、上述の別當宣發令の同日、更に別個の別當宣を以て善處方を命令したのである（註七）。而して之に依れば、（一）廳政執行に要する廳員は五位（即ち權佐）及び尉、志、府生の四員にて足ること、（二）左右の各檢非違使廳に於て、廳政執行に際し單獨にて四員構成せられざる時は、左右合併して之を構成すべきこと。以上の二件が命令せられたのである。

### （Ⅲ）檢非違使廳單獨制時代

以上の如く、寛平六年十月五日には左右の檢非違使廳設置に關する別當宣、寛平七年二月二十一日には檢非違使廳の執政執務に關する二個の別當宣が發せられた。是等は畢竟するに、檢非違使廳の職掌が繁雜を極めたること、檢非違使廳々員の人員不足、職務怠慢等に依るものであつた。

然るに寛平七年（895）より五十二年後の村上天皇元暦元年（947）に至る頃には、寛平六年十月に檢非違使廳の複合制を採用せると殆ど相似たる理由の下に、この檢非違使廳の複合制を廢止して、之を單獨制とするの止むなきに至つたことは注目すべき事である。即ち此の頃の社會狀勢は、京中

治安の紊亂に乗じて凶賊群盜の横行甚だしく、その捕縛せらるゝ者亦數多く、且つ又、律の刑事訴訟制度の中心をなす誣告反坐の制は、徒らに多數の被疑者をして拘禁せしむる等、獄中常に犯罪人、被疑者を以て満たされ、従つて其の審理を受くる日の來ることも容易でなく、空しく未決として獄中に日を送り、或は未決囚待遇の粗略より飢寒に堪えずして、獄中に其の身命を終る者も少くなかつた。而して是等の事實の主原因をなす獄囚被疑者の審理の遅延は、畢竟、檢非違使廳の複合制採用の結果より生ずる、廳政廳務の執行管掌に關する左右兩檢非違使廳の折衝に關する手續の煩雜に因るものであつた。こゝに於てか、村上天皇天曆元年（947）六月二十九日に、別當宣を以て左右兩檢非違使廳の複合制を廢止し、右檢非違使廳を廢止して左檢非違使廳のみを存し、其の廳舍を左衛門府の官衙舍たる左政舍に移轉し、爾後専ら之を以て檢非違使廳となし、京中に於ける司法警察、裁判、行刑の一切を此處に於て執行することゝなつた（註八）。

檢非違使廳の設置を單獨制とするの制度は爾後永續して、再び複合制に還ることはなかつた。王朝時代の末頃たる六條天皇仁安年間（166—168）には、左衛門府の左政舍たる檢非違使廳の廳舍が荒廢し、久しきに亘り修理せざりしために、年始の政をも執ること能はず（註九）、遂に高倉天皇治承年間（1177—1180）には、長官別當の新任毎に使廳々舍を別に其の別當館内に設置する至つた（註一〇）。

然るに、王朝時代の中頃より、過去百數十年間の檢非違使の峻嚴なる政策實施の反動として、檢非違使の腦裡に佛徒の罪業思想が深く刻まるゝに至り、これが遂に一條天皇長保元年（999）三月十日に始めて行はれたる、檢非違使廳の結縁經けちえんきやうと云ふものによつて具體化せられ、之に別當以下檢非違使廳の廳員が參列して、處刑せる罪囚の冥福を祈ることが檢非違使廳の一の慣事となるに至つた（註一一）。

かくの如き慣例より、罪囚を審理して科刑を決定する場所たる別當館内

の廳舎は、まことに罪業深き所とせられ、新任別當は廳舎を自己の館内に設置するも、別當職辭任後は在職中の減罪の意味より、その在職中使用せる廳舎を取壊して、之を佛殿に造り替へる等のことも行はれた（註一〇）。

鎌倉幕府時代の中期、龜山天皇文永年間（1264—1274）には、時の檢非違使別當藤原公孝が、中門の邊に廳屋を建て、此處に於て使廳の評定を行つたこともあるが（註一一）、時既に檢非違使廳は實力を喪失し、朝廷公家間にもみ微力を盡せる時代であり、徒らに檢非違使廳の名残を留むるに過ぎなかつた。

鎌倉幕府の滅亡後、建武中興を経て南北朝時代となるや、檢非違使廳も勢力を恢復し、南北兩期に於て、それぞれ南朝檢非違使廳、北朝檢非違使廳が置かれ、主として當時頻出せる土地に關する訴訟の裁決を管掌したが（註一二）、就中、南朝檢非違使廳よりは一種の徳政令が出されてゐることは（註一三）、注目すべきことである。

然し乍ら、南北兩朝に於ける檢非違使廳の對立は單に過渡的現象に過ぎず、政權の北朝への歸一は自づから南朝檢非違使の消滅となり、爾後、再び京都に於て、公家の一機關として存続した。檢非違使廳の實質が如何に變化せるにせよ、又その長官別當の名稱が單に一の名譽職化せるにせよ、永く朝廷の一官職として、明治の初年に至るまで存続した（註一四）。

註一 各時代の内譯は凡そ次の如くである。

檢非違使廳創設時代＝弘仁年間（凡そ811—817）——寛平五年（893）……約八十年間。檢非違使廳の實質を備ふとも、未だ形式上の存在を認められざりし時代。

檢非違使廳複合制時代＝寛平六年（894）——天慶九年（946）……約五十年間。檢非違使廳が左右に在り、各別に廳政廳務の執行管掌を爲せる時代。

檢非違使廳單獨制時代＝天慶元年（947）——慶應三年（1865）……約九百二十年間。左右の檢非違使廳合して一個の檢非違使廳となり、此廳に於て政事を行へる時代。但し南北時代に於ては南朝檢非違使廳、北朝檢非違使廳の對



立ありしも、過渡的の現象に過ぎなかつた。

註二 仁明天皇承和元年。參議從四位上支室秋津。(中略)正月七日。捕檢非違使別當。使別當始也。(公卿補任、經濟雜誌社版、國史大系、第九卷、一〇七頁)

註三 檢非違使。此云使廳。本所乃靱負廳。(職原鈔、下、六四三頁)

註四 貞觀六年八月十五日。右大辨大枝朝臣晉人傳宣。右大臣宣。檢非違使事。停本府之局。罷司司行者。(政事要略、卷六十一、紕彈雜事一、五二六頁)

註五 註六、參照。

註六 別當中納言兼左衛門督從三位源朝臣光宣稱。近者囚徒滿獄。科決猶遲。或所犯是輕。禁囚日久。或本罪既重。待斷終身。獄官之道。理不可然。因之去年十月五日。須定左右檢非違使廳。每日行政之狀已畢。而猶遲緩。不肯行之。自今以後。宜依前件行其政。不可隔日。又須所行事條目錄。每日申之者。

寬平七年二月廿一日 民部權大輔兼左近衛少將在原弘景 奉  
(政事要略、第六十一、紕彈雜事一、五二六頁)

註七 別當中納言兼左衛門督從三位源朝臣光宣。奉 勅。囚禁之事。待斷之間。身命難存。是則使等不相具之所致也。自今以後。五位及尉志府生竝四員在者。宜得其政。不可具官。須左右相交者。

寬平七年二月廿一日 民部權大輔兼左近衛少將在原弘景 奉  
(政事要略、卷六十一、紕彈雜事一、五二八頁)

註八 中納言兼中宮大夫左衛門督藤原朝臣顯忠。別當宣稱。如聞。捕禁之徒。日而無絕。未類之者。隨亦不少。或待推鞠之間。空送居謫。或究斷決之程。難堪飢寒。遂令囚禁之輩。終身命於夏臺。是則不定使局於一處。往反左右衛門府之所致也。況去寬平七年二月二十一日別當中納言兼左衛門督源朝臣光宣。定左右檢非違使廳。不可隔日行政之由。已以明也。而年紀多積。自似懈體。方今政貴簡要。還不失仍舊之蹤。事有弛張。亦盡知推斷之意。加以諸司行務。皆定其廳。至于使政。何在兩府。靜尋由緒。專非隱便。須於左右府停所行之政。以左政舍便爲使廳。每日勤行令無擁滯。然則涇渭之流自分。輕重之科早定。但官人相具。一如去寬平七年二月二十一日 奉 勅宣旨。

天曆元年六月廿九日 防鴨河使右衛門權佐齋院長官藤原朝臣成國 奉  
(政事要略、卷六十一、紕彈雜事一、五二七頁)

註九 天晴。今日靱負廳年始政始云々。于今懈怠。廳底陵遲之基也。(山槐記、仁

安二年四月廿三日庚寅條、第二冊、四五頁)

註一〇 (前略) 去年十二月廿九日渡此亭。立廳屋。依無殘日。廳始。今日所始也。(山槐記、治承三年正月三日壬戌條、第二冊、一八二頁)

註一一 使廳のけちえん經は、長保元年三月十日はじめておこなひて、其後年ごとにをこなはれけるか、絶えて久しく成にけるを、建久年中別當兼光卿かたの如くおこなはれけり云々。(古今著聞集、卷二、釋教、五二頁)

尙、拙稿「廳例の研究」(早稻田法學、第十六卷所載)二四頁、註一七参照。

註一二 今日壞却廳屋。施入因幡堂。去月十九日辭大理職。其後即可壞之處云々。(山槐記、治承三年二月廿八日丙辰條、第二冊、二三一頁)

今は使廳の廳務停止したる也、かつは聞も及ぶらん、年ごろ作し籠(一本作りおける機)もみなうちやぶりて佛殿につくりなをして一向廳務をとめめて後世の事をいとなむ也云々、(古今著聞集、卷十二、偷盜、二五七頁)

註一三 徳大寺右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて使廳の評定行はれける程に云々。(徒然草、二〇六段、一二九頁)

註一四 第五章、第二節、第三、参照。

註一五 檢非違使廳 牒諸國衙

當國住人申。負物并本物返質券田畠事。

右任國任格制。令計成敗。有子細者。可裁注進之者。以牒。

建武元年五月三日

右衛門尉中原

(詳細は大日本史料、第六編之一、五五三—五頁、七二三—五頁、参照)

註一六 公卿補任によれば、慶應元年五月十二日、葉室長順が檢非違使別當に補せられ(第五編、五六三頁)、同三年九月廿七日、山科言成が同じく檢非違使別當に補せられてゐる(同上、五八六頁)。又、文久元年十月廿五日には甘露寺勝長、萬延二年七月三十日には坊城俊政が、それぞれ衛門權佐として、使宣旨を蒙り檢非違使に補せられてゐる(同上、五八七頁)。是等は孰れも檢非違使の制の存續せることを物語るものである。尙、八二頁、註二九、参照。

## 第二 檢非違使の沿革

(其二 政權の推移を中心として)

政權の推移を中心とする検非違使の沿革は、之を藤原氏執政時代、院政時代、平氏執政時代、幕府執政時代の四期に分つことが出来る（註一）。

### （Ⅰ）藤原氏執政時代

令の規定に於ては、京都の司法警察機關としては、京職、衛府の二者が設置せられてゐる。併し乍ら、京職は警察機關としては管内の糾察權を有するものなるも、元來地方行政區劃としての京師の一般行政に關與するものにして（註二）、又、衛府は警察機關としては京中の巡檢、犯人の逮捕、非違の檢察を掌るものなるも、本來、宮衛警備を目的とするものである（註三）。されば京都の治安維持は、いづれも是等諸機關の第二次的の職務に過ぎず、且つ又、是等諸機關には一朝事ある時には、その責任を互に轉嫁せしめ合ひ、以て自己の責任を免れ得るの餘地も有り、令の規定する司法警察力たるや頗る微弱たらざるを得ない。加ふるに衛府の警察權行使も年と共に次第に慣れて形式に流れ（註四）、その實績も挙げ難くなるに至つた。かゝる情勢の下に於て、専任司法警察官たる検非違使の設置こそは、實に此の警察組織の不備間隙を補ふ所の、最も時宜を得たるものと云はざるを得ない。

検非違使は其の設置當初に於ては、僅かに衛府官人の兼任による臨時の職に過ぎざりしが、京都の警察組織に關する令の制度の不備と、當時跋扈せる盜賊群盜の横行、而して検非違使に補せらるゝ者が、武器を有する衛府官人の武官なること等よりして、検非違使の功績は忽ち顯はれ、間もなく獨立常置の專職として検非違使廳を構成し、長官別當以下、四等官に類する高等職員、並に之に配屬する下級職員を擁して其の實權を振ひ、殊に長官別當の下す命令は之を別當宣又は廳宣と稱し、之に違反するに於ては、正に違勅罪を以て處斷せらるゝに至れることは（註五）、畢竟検非違使の存在が、如何に當時の社會に要求せられたるものなるかを示すものである。

検非違使の設置せられたる當時の社會狀態は、貴族社會は別として、一般庶民社會に於ては盜賊、放火、賭博、鬪亂刃傷、迷信等の横行せる時代

にして、殊に盜賊に至つては所謂群盜と稱して數人、數十人、多きは數百數千の者が一團を爲して横行し、財を掠め、人を殺傷して、庶民貴族の邸宅は云ふ迄もなく、更に諸官衙、宮城までも侵入せる程であり、その被害の甚大にして、社會の治安を攪亂せしことは非常なるものがあつた(註六)。平安朝とし云へば、龍頭鶴首の船を浮べ、詩歌管絃の宴に耽る優美なる貴族生活を想はしむるが、それは僅かに藤原氏權門一族の豪奢生活の現れに過ぎず、一般民衆社會に於ては到底及びもつかざることであつた。併し乍ら、藤原氏としても徒らに豪奢なる生活にのみ耽溺して、政治を放擲せるものではない。殊に藤原氏執政時代の所謂公家政治は、公なるべき政治を一門の私に弄せんとする擅政にして、或は之を攝關家の政治、政所の政治とも稱さるゝものにして、朝廷の内外に於ける一切の政治機關は私有化せられ、一權分掌の令制の諸機關よりも、萬能的官職たる令外官の設置を歡迎するに至つた。藤原氏の此の目的のために歡迎せられたるものこそ、内の藏人所であり、外の檢非違使廳に外ならぬ。殊に檢非違使廳が令制により諸官司に分掌せられたる巡察、追捕、檢斷、理獄等の司法警察、裁判、行刑の權を、衛府、彈正臺、刑部省、京職等より漸次之を奪取せることも、たとへ時世の趨勢の然らしむる所とは云へ、その背後に藤原氏一門の權勢を擁せしが故とも見られよう。殊に檢非違使廳の強大なる實權が、藤原氏一門に對しては兎角滯滞し勝ちなりしことも(註七)、斯かる理由に因るものと見られよう。

## (II) 院政時代

藤原氏一門の御用機關の如き觀を呈し、その實權を誇りし檢非違使廳も、藤原氏勢力の失墜を來す時には、恰も之と運命を共にせざるを得ざるが如くである。藤原一門の失墜は、實に白河、鳥羽兩法皇の院政に始まる。白河上皇の始めて院中に政を聽き給ふや、その發令せらるゝ院宣は詔勅よりも權威重く、從つて其の昔、太政左右三大臣の權力を驅逐せし攝政關白の

如きも、たゞ空名を残すに過ぎざるに至つた。併し乍ら、藤原氏の失勢は以て直ちに檢非違使廳自體の失墜ではなかつた。その異なる所は、藤原氏執政時代に於ける檢非違使は、その多くは衛府官人の兼任によつて占められたる官人檢非違使たりしに反して、鳥羽院の院政時代よりは、檢非違使は主として源平二氏の武人によつて代られたることである。即ち檢非違使は依然として存在するも、唯その職に就くべき者に官人と武人との身分上の變更を來せしことである。

然らば斯くの如く、藤原氏失權によつて代れる院政時代に至つて、何故に檢非違使の有する實權が、従前の官人檢非違使より武人檢非違使に移りしかと云ふに、凡そ二つの理由が擧げられる。その一は官人檢非違使の墮弱に流れ、先例故實に捉れるに至れることにして、その二は武人檢非違使が既に官人檢非違使に代るに十分なる實力を有するに至りしことである。

檢非違使が在朝の獨立常置の專職として永續するに従ひ、檢非違使廳内には積年に亙る先例故實が形成せらるゝに至り、その職掌たる巡察追捕、檢斷、理獄、罪人移送等は元より、服裝、儀式、行列に至るまで、悉く一定の形式に墮せるに至つた。殊に先例故實の弊害は、最も敏速なるべき犯人の逮捕に於てすら見られ、市中に於ける些細の警察事件すら、一々之を奏聞し、然る後に檢非違使をして處置せしむるの慣例であつた（註八）。されば警察事件の餘りに頻出を極めたるにより、白河法皇も時の檢非違使別當たる藤原宗忠に、檢非違使の職權に屬することは一々奏上するに及ばず、別當先づ適宜に取計ひて後に沙汰致すべき旨を仰出されたる程であつた（註九）。されば、かく先例を踏み、形式にのみ倣はんとする傾向は、畢竟、檢非違使自體の設置を必要とせる弘仁頃の在朝官人の夫れと何等異なる所なく、檢非違使廳の實績の擧らざることは、尙往年の彈正臺衛府の如きと擇ぶ所なきに等しかつた。従つて弘仁の頃、衛府官人の微弱なる力による京中の警察力を強大化せる官人檢非違使が、今や更に武人に取つて代ら

れ、自らは往年の衛府官人の立場と化し、武人こそ第二の檢非違使として出現するに至り、院政の開始を契期として、こゝに第二期の檢非違使廳が武人によつて組織再生せらるゝに至つた。

源平二氏の武人は、かの承平天慶の兩亂に於て、平將門、藤原純友を誅征して以來、殊に藤原氏に信任せらるゝに至つたが、貴族政治が武事を卑める結果は、如何に武事に堪能なる傑物あるも、所詮藤原氏一門に非ざるの故を以て、朝廷に於ける高位高官に列することは尋常の業ではなかつた。従つて、武士にして京中に於て權勢を張らんと欲する者は、京中に於ける警察權を掌握せる檢非違使廳の傘下に来り、檢非違使となりて其の實力を發揮することにより、自己の權勢を獲得せんことを望んだ。この檢非違使に武士登用の傾向は、既に院政時代以前に於ても現はれてゐた。即ち官人檢非違使が連日に互る京師の群盜横行、殺害頻出にも拘らず、敢て職責を全うせず、却て盜賊に襲はるゝが如き無力を暴露するに至り（註一〇）、盜賊逮捕の如きは遠く及ばざるが如き觀ありし時に、かくの如き厖弱化せる官人檢非違使に代り、盜賊の追捕に與つて力ありし者、即ち武士にして、武士が盜賊逮捕の功により、檢非違使に補せらるゝの新例は（註一一）、衛府官人に非ざれば檢非違使たり得ざるの慣行を破棄するに至つた。而して、更に檢非違使に武士登用の機運を招來せるは、即ち彼の僧兵の京都侵入の防止であつた。

顧みるに、かの王朝中期の頃、地方政治の紊亂に乗じて廣大なる莊園を領有し、集り來れる無賴の徒を養ひ、以て佛教保護、寺院警備の名を藉りて、武藝を鍛鍊し來れる諸寺の所謂僧兵、殊に東大寺、興福寺、延曆寺、園城寺等の如き諸大寺の僧兵は、折柄白河法皇の佛教御崇拜の念厚きに驕り、自己の權勢を張りて良民を惱ますこと甚だしく、殊に南都北嶺三井寺の衆徒の如きは、不平の事有る毎に神木神輿を奉じて京都に亂入し、朝廷に強訴する等の亂暴狼藉を極めた。朝廷之を防がんとしても、武事を卑め

たる藤原氏一門に屬する諸官人の厝弱を以てしては施す術もなく、又一方、連夜に亙る強盜の出沒に對してすら、其の取締りの無力無能を曝露せる官人檢非違使を以てしては(註一〇)、到底之を制することが不可能なりしも、獨り能く之を防ぎ、却て僧兵を京都より放逐し、或は逮捕せし者は、武家出身の武人檢非違使に外ならなかつた(註一一)。白河院が院廳に於て政を聽かるゝに當り、從來の官人檢非違使による京中警察取締りの取るに足らざるを思召され、専ら源平二氏の武士を以て檢非違使に任ぜられ、延いては、此の武人檢非違使をして内裏の宿直警備をも勤務せしめられた(註一二)。白河、鳥羽兩院の院政は、實に藤原氏一門の政治上の權勢を失脚せしむると同時に、多年藤原氏の下に在つて其の權勢を振へる公家官人の檢非違使廳をして、一變して武人の檢非違使廳たらしむるに至つた。従つて武人の檢非違使に任ぜらるゝことは、最初こそ過分の沙汰なりしが、後には極めて普通のことゝさるゝに至つた(註一三)。

### (III) 平氏執政時代

武家の勢力を得るに至れる根據地は、源氏は東國にして、平氏は西國、殊に京都であつた。勿論源氏と雖も承平天慶の亂平定に當り、公家の信賴を得たることに於ては、遙かに平氏を凌ぐものがあり、京都に於ける源氏の勢力も平氏に劣らざるものがあつたが、かの保元平治の亂は、公家の朝廷に於ける政權を失墮せしむると同時に、多數の源氏一族を倒して其の勢力を一時消滅せしめ、世を擧げて平氏一門の獨り舞臺と化した。保元平治の亂の終焉後の翌々年、即ち應保元年(1161)正月より同二年(1162)九月まで、僅かに一ヶ年九ヶ月の短期間ではあつたが、かの平清盛が檢非違使廳の長官別當として京都の警察權を掌握せしことも(註一四)、その後僅か五年にして仁安二年(1167)、太政大臣の地位を極めて天下の實權を掌握するに至れる前提でもあつたらう。のみならず、彼の清盛が此の榮位に在る間、京都の警察權を專掌せる檢非違使廳の長官別當の交替を見ること六度

にして、而も其の中、三回は其の一族たる平時忠の重任たりしことも、平氏が如何に京都の警察權掌握を重要視せるかを窺ふことが出来よう。併し乍ら、藤原氏の支配下に於ける公家官人の檢非違使が藤原氏に迎合せる如くに、平氏の支配下に在る武家の檢非違使が果して能く之に迎合したであらうか。二條天皇永曆元平（1160）三月十一日、清盛と不和にして長門國に配流せられたる藤原惟方は檢非違使別當にして（註一七）、僧俊寛と共に硫黄ヶ島へ流されたる藤原康頼は當時檢非違使の現職に在りしことを以てすれば（註八一）、檢非違使が必ずしも平氏に追従せるものとは斷じ難いであらう。

#### （IV）幕府執政時代

壽永三年（1184）、源頼朝が兵馬の實權を執掌して鎌倉に幕府を開き、専ら之を執政の根據地とするに及んでは、武家と公家との關係は、鎌倉と京都との地理的關係の遠隔なる如く漸次疎遠となり、従つて檢非違使廳も自ら公家の警察機關と化して、幕府と對立するに至つた。併し乍ら、幕府が公家方の勢力恢復抑壓策として、京都に先づ京都守護を置き、京中取締の警察權を附與するに及んでは（註一九）、檢非違使廳の實權も著しく制肘せらるゝに至つた。殊に此の時代は、武家と公家とが判然と區別せられ、相對立せるものなれば、院政、平氏執政の兩時代と異なり、檢非違使は再び官人檢非違使に復歸せるものである。従つて實力の上より云ふも、檢非違使は到底武士の比に非ず、殊に盜賊群盜の處斷は全然武家の手に移り、檢非違使廳の裁斷を待たずして之を行ふ有様なりしが、例へば文治二年二月一日、北條時政が六條河原に於て群盜十八人の首を刎ねたる如きは、その最も著しきものであつた（註二〇）。又、文治三年（1187）、京都市中に群盜の橫行せし頃、檢非違使廳の之に對する取締り軟弱なるを歎かれたる後白河法皇は、源頼朝に賜はりたる院宣の中に、「只近代使廳ノ沙汰、日ヲ逐ウテ庇弱ナルコト、偏ニ鴻毛ノ如シ。在京守護武士、力ヲ合セテ沙汰致サンニ



ハ何ゾ禁遏セラレザランヤ云々。」と見えてゐることに依つても窺はれる如く（註二一）、京中の警察は、京都守護や武士の協力を俟つて始めて維持せらるゝに至る程、檢非違使廳の實力は低下してゐた。殊に建久二年（1191）四月、大江廣元が明法博士并左衛門大尉に任官し（註二二）、使の宣旨を蒙りてより一年も経ざるに、早くも辭狀を上れることに對して、之を聞きし源頼朝が、「此事太ダ御意ニ相叶ヒ云々」と云つて（註二三）、廣元の辭意を首肯せしことは、既に檢非違使廳の爲す所なきを知れるが故であらうが、嘗ては武士が檢非違使たらんことを懇望せしに比して、今や之を嫌ふに至つては、檢非違使が如何に武人と隔離するに至れるかを驚かざるを得ない。

京都に於ける檢非違使の無能は、地方に於ても影響する所が少くなかつた。國司の權が守護に移り、莊園の領主が地頭に抑壓せらるゝに至つては、從來、國司の下に在りて、國內の警察權を専ら行使し來れる諸國檢非違使も、早晚その地位を是等の幕府の機關たる守護地頭に譲らざるを得なかつた。然し鎌倉幕府の勢力が全國に徹底するに至る迄の間は、地方の警察權を掌れるものは依然として檢非違使にして、守護地頭制度の確立せらるゝ迄の過度期に於て、檢非違使、檢非違使の名に於て、檢非違使所或は檢非違所と稱する本據を有して、地方の治安維持に任じてゐた。併し乍ら、漸次没落の道を辿りつゝありし檢非違使廳をして、遂に全く京都市中に於ける其の實權を失墜せしめたるものは、即ち彼の承久の亂であつた。承久の亂は云ふ迄もなく、政權の幕府に移り、院政は名のみとなれることを御不満に思召されたる後鳥羽上皇の御發議に端を發せるものであつたが、その結果は公家方の慘敗に歸し、頼朝の幕府開設以來、公武兩者の間に醸されたる感情の綻れは清算され、京都は遂に北條執權の實力下に屈服するに至つた。この結果、内裏警備を口實に、朝廷の動靜探索の機關として、兼ねて關西の重鎮として新設せられたる南北兩六波羅探題こそ、實に檢非違使廳の實權を大いに制肘せるものであつた。

承久の亂後、檢非違使廳は朝廷に於ける警察、裁判の機關として永續した。殊に寶治二年(1248)より文永四年(1267)に至る間の檢非違使補任を記録せる續群書類從檢非違使補任によれば、強盜放火犯を逮捕せる者が、その恩賞として使の宣旨を蒙れる者も少くない(註二四)。又、囚獄の執行をなし、防鴨河使、修理宮城使等を兼任せる者もあり、兎に角、檢非違使の稱號は朝廷より附與せらるゝものにして、幕府の恣に爲し得ざるものであつた(註二五)。龜山天皇弘長三年(1263)發令の公家新制四十一箇條には、博奕、過差、狼藉を使廳武家に仰せて禁遏せしめられ(註二六)、更に下つて後醍醐天皇元享元年(1321)には天皇の仰せを蒙り、時の檢非違使別當藤原經宣が、當時富豪連が利倍の目的を以て蓄積せる米穀を點檢して、二條町に假屋を建て、檢非違使をして價格を定めて販賣せしめたることもあつた(註二七)。然し斯かる一般社會との交渉は稀有のことにて、檢非違使廳の名は朝廷に於ける一機關として留まるに過ぎなかつた。而して檢非違使廳の長官たる別當職の名は、大日本史によれば室町幕府の初期たる後小松天皇明德三年(1392)十一月、第二百八代の別當たる藤原資衡を以て最後としてゐるが(註二八)、公卿補任は其の後の別當名をも載せ、後小松天皇應永元年藤原重光の檢非違使別當補職以後、十數代に亙り之を明かにして居るのみならず、更に下つて慶應三年九月廿七日には山科言成(藤原姓)が右衛門督、檢非違使別當に任ぜられたることをも掲げたれば、檢非違使廳そのものの實權は別として、長官別當名の明治の初年まで事實上残れることは、たとへ別當が名譽職化せるとも、その存續期間の永きに亙れることは、その設置當初の事情と對比して興味ある事實である(註二九)。

註一 各時代の内譯は凡そ次の如くである。

藤原氏執政時代＝弘仁年間(810—823)——應德三年(1086)……約二百七十年間。官人檢非違使の隆盛時代。

院政時代＝寛治元年(1087)——保元元年(1156)……約七十年間。

武人檢非違使の實力掌握時代。

平氏執政時代＝保元二年（1157）——壽永二年（1183）……約二十五年間。

武人檢非違使の實力掌握時代。

幕府執政代＝（１）壽永三年（1184）——承久三年（1221）……約三十七年間。官人檢非違使と武士との對立時代。

＝（２）貞應元年（1222）——慶應三年（1867）……約六百年間。官人檢非違使衰微時代。

**註二** 大夫一人。掌左京戸口。名籍。字養百姓。糾察所部。貢舉。孝義。田宅。雜徭。良賤。訴訟。市厘。度量。食廩。租調。兵士。器仗。道橋。過所。關造雜物。僧尼名籍事。（令義解、卷一、聯員令、左京職、五六頁）

**註三** 督一人。掌諸門禁衛。出入。禮儀。以時巡檢。及隼人。門籍門榜事。（令義解、卷一、職員令、衛門府、五三頁）

其衛府糾捉罪人。非貫屬京者。皆送刑部省。（令義解、卷十、獄令、二八五頁）

**註四** 衛府官人が京中の盜賊の搜索を爲すことが例となつて、大索と稱する宮中臨時の行事を生ぜしむるに至れるは其の一例である。尙、大索の實施次第の實例は本朝世紀、天慶二年四月廿八日、同廿九日の條々に見えてゐる。尙、第五章、第一節、第二、參照

**註五** 別當宣者即廳宣也。古來被准勅宣。仍天下重之。違背廳宣者。可准違勅云々。（職原鈔、下、六四三頁）

**註六** 詳細は故谷森饒男氏「檢非違使ヲ中心トシタル平安時代ノ警察狀態」に述べられてゐる。

**註七** 左衛門督賴宗卿云。來月九日可上辭檢非違使別當之表。廳事極以不便。無爲術者。別當之外。右被自由之氣色。互細事等。惣不能執行。官人等心非清直者。令見氣色。依入道命。官人等任意執行。不觸別當歟。他別當彌難行乎。（小右記、寛仁三年十一月十六日戊辰條、第二冊、二九八頁）

**註八** 仰云。院御厩舍人則松。與春日神人鬨亂事所聞食也。仍解則松御厩舍人職追却已了。於今者任如可沙汰。但件則松又稱祇園神人云々。則參殿下申件事。殿下參內給之間也。早可付檢非違使廳由殿下所被仰也。（中右記、長治元年五月廿四日條、第二冊、三五八頁）

今昔。□□天皇ノ御代ニ西ノ市ノ藏ニ盜人入ニケリ。盜人藏ノ内ニ籠タル

由ヲ聞テ。檢非違使共皆打衛テ捕ヘムト爲ルニ。上ノ判官□□ノ□□ト云ケル人。(中略) 檢非違使共ノ有ル所ニ打寄テ。此レハ様有事也ケリ。暫ク此ノ追捕不可被行ズ。可奏キ事有ト云テ。内ヘ參ヌ。其ノ間檢非違使共ハ打廻テ立ル程ニ。暫許有テ上ノ判官返リ來テ。此ノ追捕不可被行ズ。速ニ罷リ返セト宣旨有ト云ケレバ。檢非違使共此レヲ聞テ引テ去ニケリ云々。(今昔物語集、卷廿九、西市藏入盜人語第一、九四〇頁)

**註九** 使廳之事。強不可奏。別當只相量可沙汰。先ニモ子細不奏也云々。(中右記、永久二年六月廿四日條、第四冊、三一九頁)

**註一〇** 日者京師不閑。足可驚怖。群盜盈巷。殺害連日。是檢非違使等不勤職掌之所致也。(小右記、天元五年二月廿七日庚寅、第一冊、一二頁)

**註一一** 犯人籠禁中。藏人右兵衛尉源齊賴。并瀧口源初。小野幸任等捕進件犯人。仍齊賴蒙檢非違使宣旨。初任右兵衛尉。幸任任右馬允。(扶桑略記、第廿九、天喜三年乙未三月十八日條、二九三頁)

**註一二** 早旦歸家。檢非違使成國來談云。去夜治部大夫時忠爲強盜被切殺了。凡京中連夜強盜入人家。被殺害者其多。大略使廳力不及歟。何爲哉。只天下之滅也云々。(中右記、元永二年二月三十日條、第五冊、一一五頁)

**註一三** 永祚元年九月廿九日宣命。勅使少納言源能遠。十月一日登山之處。山徒數百人向會水飲邊追還了。同四月重寫宣命差時方率檢非違使令遂宣命了云々。(天台座主記、第二十大僧都餘慶條、群書類從、第三輯、二七頁)

從興福寺所被擲進之僧二人。給檢非違使時眞。是依長者仰也。被禁獄了由時眞歸來告也。件僧犯過者。去三日夜。於五大院內殺害修學者忠觀者也云々。(中右記、長治元年十月廿日條、第二冊、三八三頁)

今夜山之大眾下京。舉火下從山間如星連。雖下集西坂下。如檢非違使武士於河原相禦之間不入洛云々。(中右記、天仁元年三月卅日條、第三冊、三四一頁)

夜前從臺嶺所下向之大衆等。早日吉神輿發向西坂下。神人衆徒數千人群集。爰又爲相禦。公家所指遣之檢非違使。并源氏。平氏。天下弓兵之士。武勇之輩數萬人。從如成寺東成河原及松前邊。引陣結黨相守不入。亥甲連道。白刃映日。數十町間人馬相滿云々。(中右記、天仁元年四月市月日條、第三冊、三四二頁)

興福寺衆徒蜂起數千人。春日神民二百餘人。棒棒神木入洛。吹法螺。其聲充滿洛中。(中略) 檢非違使 光保護內裏。檢非違使家弘禪候新院。各率隨兵。奉致警衛。興福寺別當未補。漸及多年。寺僧等不堪鬱憤。所群集也云云。(百鍊抄、第七、近衛、久安六年八月五日條、六八頁)

延曆寺衆徒猶可發向之由有其聞。可警固西坂下。不拘制止者。任法射禦之由。被仰檢非違使。(百鍊抄、第八、高倉、嘉應二年正月十三日條、八四頁)

註一四 (前略) 光信。爲義。保清二人ノ檢非違使ヲ朝タニ内裏ノ宿直ヲバツトメサセラレケルニナン云々。(愚管抄、第四、鳥羽、一二〇頁)

註一五 侍程者か、靱負尉にもなり、受領檢非違使に至らん事、何か過分なるべき、始めたる事に非ず云々。(源平盛衰記、保卷第五、成親以下召捕、一二〇頁)

註一六 應保元年。正三位平清盛。右衛門督。正月廿三日近江權守。同日別當。九月十三日任權中納言。(公卿補任、經濟雜誌社版、國史大系、第九卷、四五八頁)  
永萬元年八月十七日ニ清盛ハ大納言ニナリニケリ。中ノ殿聲ニテ世ヲバイカニモ行イテント思ヒケル程ニ。ヤガテ仁安元年十一月十三日ニ内大臣ニ任ジテ。同二年二月十一日ニ太政大臣ニハノボリニケリ。(愚管抄、第五、六條、一四七頁)

註一七 (前略) 主上二條院ノ外舅ニテ大納言經宗。コトニ鳥羽院モモツケマイラレタリケル惟方檢非違使別當ニテアリケル。(愚管抄、第五、二條、一三九頁)

註一八 俊寛ト檢非違使康頼トヲバ疏黄ケ島ト云所ヘヤリテ。カシコニテ又俊寛ハ死ニケリ。(愚管抄、第五、高倉、一五〇頁)

註一九 この詳細に就ては、武家名目抄、卷五、職名部廿六、上、洛中警衛の項(故實叢書本、四八四—四八九頁)に見えてゐる。

註二〇 今日。北條殿於六條河原。刎群黨十八人首。凡如此犯人者。不可渡使廳。直可處刎刑之由云々。(吾妻鏡、第六、文治二年二月一日己酉條、前篇、一九八頁)

又正月廿三日。同廿八日。洛中群盜蜂起。則擄獲之。去一日。十八人梟首畢。經數日者。似寛刑之間。不及召渡使廳。直致沙汰云々。(吾妻鏡、第六、文治二年二月十三日辛酉條、前篇、二〇〇頁)

(前略) 而行平九月十一日入洛。即夜窺兼承及群盜聚會之所々。令郎從致

夜行之處。於尊勝邊寺。行逢奇恠之者。人數八人。不殘兮擲取之。事明所犯之間。不相待常胤。將又不相觸使廳。任北條殿之例。刎被等首訖。(吾妻鏡、第七、文治三年十月八日乙亥條、前篇、二七八頁)

**註二一** 只近代。使廳沙汰。逐日尫弱。偏如鴻毛。在京守護武士。合力致沙汰者。何不被禁遏乎由云々。(吾妻鏡、第七、文治三年十月三日庚午條、前篇、二七五頁)

**註二二** 前因幡守中原廣元剩任明法博士并左衛門大尉。蒙使宣旨。經家之人任廷尉希代事也。(百鍊抄、第十、後鳥羽、建久二年四月一日戊寅條、一二〇頁)

**註二三** 廷尉廣元書狀自京都參着。當職事既上辭狀訖。其案文謹獻上云々。此事太相叶御意云々。(吾妻鏡、第十二、建久三年三月二日甲戌條、前篇、四六一頁)

**註二四** この一例を舉ぐれば次の如し。

○正元元年。

大尉從五位上中原朝臣章職。大判事。明法博士。伯耆權介。法勝寺後戶。七月廿七日正下。清渡河合□□強盜并粟田宮放火犯人等之賞。(檢非違使補任、續群書類從、第四輯、二二三頁)

○弘長三年

中原朝臣行實。月日叙正下。右獄囚等穿獄舍逃失之内。不知姓太郎丸友宗朝臣召渡搦連之賞。(同上、二二八頁)

尙、詳細は續群書類從、第四輯所收の檢非違使補任(二〇八——二三七頁)に見えてゐる。

**註二五** 一官爵所望輩申請關東御一行事

右被召成功之時。被注申所望人者。既是公平也。仍非沙汰之限。爲昇進。申舉狀事。不論貴賤。一向可被停止之。但申受領檢非違使之輩。於爲理運者。雖非御舉狀。只有御免之由。可被仰下歟。(貞永式目、四一八頁)

尙詳細は御成敗式目注、續々群書類從、第七、二二七——一八頁、參照。

**註二六** 一可停止博奕事

仰。諸惡之之源。起自博奕。使廳武家加禁遏者。盡違行乎。成犯輩。任法召取其身。破却其宅。不限所犯之居處。可懸兩方之隣家。縱不下手。若令阿容者。處同罪。

(公家新制。續々群書類從、第七、一八八頁)

一可停止稱有犯科。無左右切住宅事。

仰。如刃傷殺害。其罪科難遁者。可相觸使廳。而直破却住宅。已相背政道。狼唳之至。梟惡不輕。於其仁者。可被禁獄。於其住宅者。懸緣者可造返也。  
(同上)

**註二七** (前略) ソモ猶萬人ノ飢ヲ助クヘキニ非ストテ檢非違使ノ別當ニ仰テ富有ノ輩カリ倍ノ爲ニ蓄ヘツメル米穀ヲ點檢シテ二條町ニ假屋ヲ置レ檢使自斷テ直ヲ正シ被賣云々。(太平記、卷一、關所停止事、并斷行事、三頁)

**註二八** 大日本史、卷三九一——四、藏人檢非違使表、第十六冊、一——二七九頁。

**註二九** 山科言成。慶應三年九月廿七日任。右衛門督。使別當。後四月廿二日辭兩官。(公卿補任、第五篇、五八六頁)

之に類するもの二、三を列擧すれば次の如し。

甘露寺勝長。文久元年十月廿五日。兼左衛門權佐蒙使宣旨。(公卿補任、第五篇、五八七頁)

坊城俊政。萬延二年七月二十日。兼右衛門權佐蒙使宣旨。(同上)

葉室長順。慶應元年五月十二日。兼右衛門督補使別當。(同上、五六三頁)

### 第 三 諸國檢非違使及び神郡檢非違使の沿革

京都に於ける檢非違使及び檢非違使廳の沿革が、比較的明かなるに反して、諸國檢非違使及び神郡檢非違使のそれは、甚だ不詳である。蓋し前二者に關する史料は比較的殘存せるに反し、後二者に關する史料は僅少、且つ蒐集の困難なるに因る。

#### (I) 諸國檢非違使の沿革 (其一 王朝時代)

諸國檢非違使は國司に隸屬し、非違の檢察、犯人の逮捕等を專職とするものであるが、太政官より國檢非違使として諸國に派遣赴任せしめられたる者の外は、その多くは太政官の認可を得て、在國の適任者を以て之に補せることは既述の如くである。然るに此の檢非違使の權力の強大なところより、國內の豪族中には自ら檢非違使たらんことを望む者多く、その檢非違使たるの地位獲得のために、國司に金品を提供するが如き、一種の賣官

の弊風を見るに至り、延いては其の弊害も甚だしくなれるため、宇多天皇の寛平六年(894)九月十八日、太政官符を以て諸國檢非違使の濫補を停止せしめ、無位の者をして之に補せざること、竝に六年の秋限を定めて、年限の満期に達すると同時に、之に代る檢非違使の有無に拘らず解任せしむる、一種の諸國檢非違使に關する任用令並に任期制を定むるに至つた(註一)。

斯くして賣官による諸國檢非違使濫補の弊害を除去せんことに努めたるも、二十年後の醍醐天皇延喜十四年(914)四月二十八日上奏の有名なる三善清行の意見十二箇條によれば、右の諸國檢非違使濫補禁止の制も間もなく亂れ、賣官の弊害は依然行はれ、諸國の百姓中には贖勞料と稱するものを國郡司に納付することによつて、檢非違使に補せらるゝ者の少なからざることが指摘せられてゐる(註二)。

延喜十四年四月三善清行の意見封事の上奏あつて後二十餘年にして、かの天慶の亂の勃發を見るに至り、爾後我國の社會情勢は一變して國家權力は中央集權より地方分權への傾向著しくなり、大地主制度たる所謂莊園時代の出現を見るに至つた。而して此の時代に於ける諸國檢非違使に關する消息は、史料の不足により之を詳細に知る術もないが、王朝時代の末期より鎌倉時代の初期に於て、再び諸國檢非違使の擡頭を見た。但し時既に其の名稱を異にし、通例、之を檢非違所使と稱してゐた。

## (II) 諸國檢非違使の沿革 (其二 鎌倉時代)

京都に於ける檢非違使は、檢非違使廳なる一官府を有する獨立常置の職であるが、諸國に於ける檢非違使は、既述の如く國司に隸屬するものにして、従つて其の職務も國司の國衙に於て取扱はれたのであるが、後には特に檢非違使所なる役所を設けて、此處に於て職務の管掌に當つてゐた様でもある(註三)。然るに王朝時代の末期に至り、國司の實權が衰微し、加ふるに武家時代に至つて鎌倉幕府の設置せる諸國の守護及び地頭の制は、全く國司及び莊園領主の勢力を事實上抑壓した。この過渡期に於ける地方の



治安維持擔當者は、即ち諸國檢非違使、押領使、追捕使等であつた。後二者のことは暫く措き、この間に於ける諸國檢非違使は、國司の實力失墜の結果により其の據る處を失ふに至り、こゝに諸國檢非違使の本據たる檢非違使所（別名、檢非違所）の存在が、國衙の存在よりも重視せらるゝに至つた。この事は勿論確固たる根據に基く斷定ではないが、源平盛衰記、吾妻鏡、東大寺文書等に見る檢非違所、檢非違使所、檢非違所使等の名稱の「所」なる意義が、既述の如く、官公署の意義を爲すことより、是等が専ら諸國檢非違使の執務所として國司の直接支配下を脱せるものと推論せる結果である。その名稱は、諸國の檢非違使と云ふに對して、その執務所を檢非違使所と云ひ、又諸國の檢非違所使と云ふに對して、その執務所を檢非違所と云へるものに過ぎず、その實體は同一のものと思はれる。

源平盛衰記によれば、平清盛が南都の大衆が蜂起騷擾せし時、之を鎮定せしむるために備中國住人妹尾太郎兼廉を大和國檢非違所に成したること、及び大藏卿藤原爲房が加賀守たりし時、平清盛の祖父平正盛を檢非違所（國名不詳）に召し仕へせしめられたることが見えてゐる（註四）。又、鎌倉幕府執政時代に入つて、後鳥羽天皇文治二年（1186）七月、伊勢國檢非違所使が東大寺領に濫妨せしを以て、之を停止せしめられんことを、東大寺より太政官へ解狀を上つて請へることが東大寺文書に見えてゐる（註五）。更に又、吾妻鏡によれば文治二年（1186）四月、源賴朝が長谷部信連の武功を賞して之を家人と爲し、安藝國檢非違所を附與せしこと（註六）、文治五年（1189）九月には、葛西清重をして奥州平泉郡内の檢非違所使を統括管領せしめ、諸人の亂行を停止し、罪科を糺斷することを掌らしめられたことが見えてゐる（註七）。之に依つて見れば、鎌倉幕府は地方の治安維持取締りの手段として、一方に於ては新たに守護を設置すると共に、他方に於ては從來地方の警察權を掌握せる檢非違使所（檢非違所）を漸次接收して、之を掌中に收めんとせしことが窺はれる。されば鎌倉幕府の執政開始と共に、

王朝時代の名残たる諸國の檢非違使も、結局幕府の支配下に在ることを餘儀なくせしめられたるものであるが、守護地頭の設置せらるゝに及んでも、尙、一時、地方に於ける警察權を掌つてゐたものである（註八）。然るに後堀河天皇寛喜三年（1231）五月、幕府が全國の守護地頭及び檢非違所に下せる命令中、檢非違所の職務は専ら貢物を收納すべきことを規定するに及び（註九）、檢非違所も本來有せし職權たる警察權を喪失するに至つた。

### （Ⅲ）神郡檢非違使の沿革

寛平九年十二月二十二日の太政官符により、伊勢大神宮の神郡内に於ける非違檢察の目的を以て設置せられたる檢非違使を以て、神郡檢非違使の最初とする（註一〇）。この伊勢大神宮の神郡檢非違使の沿革に就ては、目下の所では之を詳かにすることを得ざるも、東寺百合古文書によれば、白河天皇應徳三年（1086）七月の年月日を以て「大神宮檢非違使新家俊晴」の名が見えてゐるが（註一一）、これは寛平九年より百八十九年後のことである。之によつて見るも、伊勢大神宮は一時的にのみ設置せられたるものに非ざることが窺はれる。

神郡檢非違使は伊勢大神宮に設置せられたる外に、常陸國の香取鹿島兩神宮にも設置せられた。その最初の設置年代は不詳なるも、その設置理由は恐らく伊勢大神宮に於ける神郡檢非違使の場合と同様であらう。事少しく後聞に屬するが、鹿島神宮古文書によれば、後柏原天皇の永正十八年（1521）正月の記事に、「社頭毎日番次第（中略）、十五日、檢非違使……、右此旨可守也、」と見えてゐるが（註一二）、これは戰國時代に於ける北條氏が、小田原城に據りて關東の大半を風靡せし頃のものである。この頃に於ても尙、鹿島神宮に檢非違使の存在を見ることは、他の諸國檢非違使が公家政治より武家政治の世に移ると共に没落せしと異なり、爲政者の如何に拘らず其の壓迫干涉を受くることなくして自主的存在を續け、王朝時代の名残たる神郡檢非違使の存在を失はざりし點に於て、この神郡檢非違使の

特色が窺はれよう。

**註一** 寛平六年九月十八日太政官符。應諸國檢非違使立秩限竝停補無位人事。

右檢案内。把笏帶劍。威儀不輕。糾察追捕。職掌惟重。而年來所任。不必其人。官縱雖卑。選何疎略者。大納言正二位兼行左近衛大將皇太子傳陸奥出羽按察使源朝臣能有宣。奉勅。宜自今以後。停補無位人。竝以六年爲一秩。唯職非永例。隨時廢置。先任之輩秩限滿。則不待替人。直從解任。

(類聚三代格、卷五、定秩限事、二三四頁)

**註二** 一、請停以贖勞人補任諸國檢非違使及努師事

右諸國檢非違使。掌糾境內之姦濫。禁民間之凶邪。然則國宰之爪。牙兆庶之銜策也。必須明習法律兼詳決斷。而今任此職者。皆是當國百姓。納贖勞料者也。徒費公俸。不堪差役。空帶其名。曾非其器。亦猶如畫餅不可食。木吏不能言。伏望。監試明法學生。宛任職々。其試法一如明經之試。國中追捕及斷罪。一向委此檢非違使。猶如京下有判事及檢非違使也。(下略)

延喜十四年四月二十八日 從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事  
(本朝文粹、卷二、意見封事、三六頁)

(意見十二箇條、群書類從、第十七輯、一一五頁)

**註三** 村上天皇康保二年(995)には既に檢非違所なる名稱の存せしことは、次の西宮記の記事を以ても知られる。

康保二年十三。右大臣<sup>〇</sup>奏<sup>〇</sup>檢<sup>〇</sup>非<sup>〇</sup>違<sup>〇</sup>所<sup>〇</sup>勸<sup>〇</sup>文。仰云。好古賜播磨非違下已了。自今以後。諸國檢非違使之替。秩滿年誤。雖下宣旨非違所。須申返之。(西宮記、卷十二、臨時一、三一五頁)

**註四** 太政入道不安思て、大衆をおどさんとて、備中國佳人、妹尾太郎兼康を大和國の檢非違所に成て、數百騎の兵を相副て、下遣たれ共、大衆其にも恐れず、蜂起して、押寄散々打落し、兼康か家子郎等の頸、廿六斬て、猿澤の池の端に懸たり。兼康蚩々都へ逃上る、面目なくぞ見えし。是のみならず、南都には清盛入道は平氏の中の糟糠也。武家に取ては塵芥也。いかにといへば、祖父正盛は、正く大藏卿爲房の加賀國知行の時、檢非違所に被召仕き云々。(源平盛衰記、字卷第二十四、南都合戰同焼失附胡總樂河南浦樂事、五七六頁)

**註五** 一同可被停止伊賀國檢非違所使。連日亂入寺領。無指故據。取百姓牛馬私財。追捕莊家。不當事。(文治二年七月日東大寺文書、大日本史料、第四編之

## 一、五三〇頁)

**註六** 信連自國司給安藝國檢非違所并庄公畢。不可見放之由云々。(吾妻鏡、第六文治二年四月四日辛亥條、前篇、二一七頁)

**註七** 平泉郡内檢非違使所事。可管領之旨。葛西三郎清重賜御下文。於郡内。諸人停止濫行。可糾斷罪科之由云々。(吾妻鏡、第九、文治五年九月廿四日辛巳條、前篇、三五八頁)

**註八** 一、双傷殺害人禁斷事

右先相觸所在之庄公糾明犯否。任實令搦出之時。可請取之。無左右使者亂入事。可停止。兼又國司一所之中。檢非違所別當爲宗所職也。而守護人令管領之間。云盜犯放火云勾引人。如此犯人不及成敗云々。早停止守護人之妨。任先例可爲檢非違所之沙汰。(新編追加、侍所篇、五三一頁)

**註九** 今日。有被定下條々。先諸國守護人者。大犯三ヶ條之外。不可致過分沙汰。檢非違所者。廻寬之計。可專乃貢勤之由云々。(吾妻鏡、第廿八、寛喜三年五月十三日戊戌條、後篇、一〇七頁)

**註一〇** 類聚大補任云。寛平九年十二月廿二日被始置大神宮司檢非違使。(類聚三代格、卷一、神郡雜務事、四〇頁)

尙、第三章、第二、註一二、本稿六三頁、參照。

**註一一** 東寺百合古文書、古事類苑、官位部、第二冊、一七八頁。

**註一二** 鹿島神宮古文書、古事類苑、官位部、第二冊、一七八頁。